一の谷嫩軍記

作者　浅田一鳥　浪岡鯨見
並木正三　難波三蔵
豊竹甚六　並木宗輔

○第一

戰克の將ハ國の爪牙、犬馬の人を勞則帷蓋を以て是を覆、況大功の人ハおいておや重せずんハ有べからずと、漢書ハ見へしも宜なるかな、九郎判官義經兄の下知ハ依て、奢平家を討亡し、朝家をやすんじ奉らんと、軍慮をうおがず堀川ハ所「日夜ハ評議區なり、いで其頃ハ壽永三年二月半卿の君のハ父平大納言時忠倫ハ須磨の皇居より入來を儲の上座ハすすめ、先以遠路の所ハ苦勞千万と、挨拶有ハされハ〳〵、樣〻術を以て、神璽と八咫の鏡ハ念なう奪ひおふせしが、十握のハ劍ハ安德天皇晝夜隨身ましませば思ふ任せず、先二色の神寶受取給へと有けれハ、謹で重拜有、コハ忝さハ念志、是偏ハ舅君のハ働と、悅喜の詞ハ時忠重て、扨又平家

の要害、險岨を賴の地理陣取、中〻容易の事よあらず則繪圖よ印せりと取出し手よ渡せば逐一細見ある所へ、五條〻三位俊成卿方のお使者、只今是へは出と、取次聲や、長袖の花の香名のみ、菊の前襠姿のつゑりとたばひ、頃なる白菊の露をおびたるごとくよておめず憶せず打通り、大將のは座近くゑとやかよ手をつかへ、わらわ〻五條三位が娘菊の前と申者、父俊成わ禁裏よて千載集の役折から旅人とおぼしき者、此歌を集よ加へて給われと一向の願ひ、見れば天晴秀逸と感じながらも、私よ加へん事もさだかならず、は伺ひの爲參上と、入事計り詞數いわぬ色なる戀人の、短冊は前よ指置もゑゑやくてぼる〻風情也、義經も忠度の詠歌とゑれどさあらぬ體、手よ取て吟じらる、さゝ波や、志賀の都わあれよしを、昔ながらの山櫻かな、ハレ香しやあてやかや、何かわ苦しかるべきと、賞美の詞を時忠打けし、其歌集よわ入られまじ、罷ならぬと傍若無人、さ〻ゆ

る詞を菊の前、イヤ〻時忠樣、お聞の通あの歌ハ父俊成も感心し、君もは賞美ましますを集よ入なとおつゝやるハ誤りばし有ての事か、憚ながら今一度吟じかへしては評議有と、いひも切せずャア愚〳〵、ソレ其歌ハ薩摩守忠度、白髭明神社參の時志賀よて詠しハ犬打、童も知所、元來忠度ハ俊成が門家、弟子ひいきよ平家へ近寄、後ぐらき此使退かへされよと云はぐせゞ、菊の前詰寄て、イヤ〻し、弟子を贔負よ平家へ心寄るとハ太切なるお詞、それよハ慥なホ、證據といふハ其方と薩摩守、兼てより樣子有事知てゐる、其縁よ俊成が平家をかゞふ所存といふが某が誤りかと、我も平家で有なから前後揃ハぬ詞たゝかひ、義經暫しとゝゞめ給ひ、平家方よ縁有りと、一旦不審立つ上ハ俊成卿迄越度と成り、集よ入る事かたかるべし、去ながら所存有れゞ此短冊、義經が預り兎も角もはからハん、此趣を傳へられよと始終を遺良將の、風雅の返答尤と時忠詞を扣ゆれゞ、力

及ばず菊の前猶も摺寄手をつかへ、父俊成も此秀歌惜む心よりへば跡なよきよりは差圖と、思ひ定めし言の葉も、花よ嵐の時忠よ、心殘してお暇ヤし五條の館へ、立歸る、お次の方は、武藏國の住人岡部の六彌太忠澄、熊谷、次郎直實參上と、披露を待ず立出て、六彌太は前よ手をつかへ、頼朝公は墨付、到來と指出し西國の軍數日延引よ付再三のは催促、一日も早くは出陣と、諫と俱よ次郎直實、君は存ぜられずや、鎌倉よりの佞臣かしく義經の平大納言時忠の娘、卿の君よは心を寄られ、亡慮のかずへあんと頼朝公よ讒言ヤ族も有と承りしへば、時移るの惡かりなん、急ぎは出馬然るべしと詞を揃ヤける、大將莞爾と打笑玉ひ、兩人が諫尤なから、謀を帷幕の内よめぐらし、勝事を千里の外よ顯すこそ始終の勝利たるべき也、義經發向遲なるの、安德天皇所持し給ふ三種の寶、都へ返すを妬く思ひ唐土天竺へも渡すか、若海底のみくずとならば寶祚の傳

ます、日の本にくらやみ、とやせんかくやと心をいため、是よおにする平大納言時忠に心惰弱なるは方なれば儻て緣者と成、頼より早かけ入て是見よ、神璽内侍所に我手よ入、寶劍に安德帝は身を離させ王にねば、術を以て奪かへさん、要害嚴しき平家の備へ、繪圖よ畫せて案内を玄る、見よ見よ旁嶮岨を頼の汕斷を見合せ、鵶越方眞下たり、逆落しよ攻入ば、あてふためく平家の一類、討取に手裏よ有と、智仁勇備の良將の軍慮を聞て諸大名はつと感ずる計也、ソ時忠卿、一旦緣を組し上に別心なき聳眞、天下の爲の謀は心よさへ玉ふなと、忿をなだむる頓智の詞、時忠に默然と、指真て居たりける、義經重て、ヤア誰か有用意の制札、はつと答て高札さしげは前よ指置ば、ずつと立て床の間の、筒よ生たる、薄櫻よ件の短冊結び付いかよ兩人、今度の軍に勅諚の一戰、私の趣意よあらず、六彌太に薩摩守忠度の陣へ向ひ、は願ひの此は詠歌千載集よに入しか共、勅勘の身なれば名を顯にすを憚りて讀人玄れずと記されし趣を演說し、集

よ入たる其印、此短冊を結びたる山櫻を送べし、又熊谷ハ搦手の、經盛勢盛固たる須磨の陣所へ打向ひ、若木の櫻を汝が陣屋、義經花よ心をこめ、武藏坊辨慶よ筆を取せし高札、此花江南所無也、一枝折盜の輩よおいてハ、天永紅葉の例よ任せ、一枝を伐ハ一指を剪べし、此禁制の心をさとし、若木の櫻を守護せん者熊谷ならで外よなし、其旨屹度心得よと高札ハ直實歌ハ岡部よ給けれハはつと兩人領掌し心を含禁札の、外を和ぐ和歌の道花をいたハる大將よ實有、色有、情有、恥有時忠詞なくふせう〳〵よ立上れハ、二人の勇士も退出の底の底意を堀川や、深き惠を汲分て祝ひことぶく、「ハ代の春、柳櫻や、松梅も皆ハ慈愛よ、生茂り、北野の社かうかうと木の間〳〵よ打幕の内ハ男女の色はへて都ぞ、春の錦なり、九郎義經のハ臺、卿の君、幕をぼらせて出給へハ跡よ付〻妙共、〻〳〵姫君樣、いつよないそハ〳〵と何をハ覽遊ハすと、尋られてされハいのふ、義經樣

の此社へ毎日のお詣、則けふが滿る日とけさ程からお參詣お道向ひの心よて思ひ立た此遊山、木〻の花より紅葉より早ふお顏が見たさよと、夫婦よ成ても惚てゐる、心の詞よ出よけり、妙共も氣をのぼしうのそらめかあれ〳〵、社の方か深編笠立派な若衆供よ連、當世風のやさ姿お姫樣にらふゑやれ、ようよた姿やないかいなと、いふ間程なく九郎義經、天滿神へ日參よけふ百日の滿願も、人目を忍ぶ深編笠、熊谷の小次郎を供の丁稚よ引連て、しづかよ下向まし、ませば、卿の君出向ひ、げさとく參詣遊ばして今比のお下向の、定て道よ面白いお心寄が有たであろ、さすられなされた此肌を、改めたいと引寄て、ふと股ふつゝりアイタ〻、何がいたいへま一つと、つめつた跡の紫の、ゆかしの色と見へよけゐ、義經もお機嫌よく、是のめいわく、けふの遊山と聞し故、大内の色所嫁入ぬ先よ結ばれた、よしみの人よもお出合かと、遠慮で態遲うきたと、もたせ詞よ

姫君ハ顔打赤めコヤ、そんなさもしい濡衣の疑受る覺ハない、わやくな事をと計りよておろ〳〵涙に咽共、こりや殿様の皆ハ無理、何ぼ程隱しても新枕が證據人、たいそよ有たかなかつたかお心よ覺がわろ、ヲレ〳〵ヤお姫様の癪が上つた、療治して上なされ、何ぞで足納あされたら虫がさがろとむりやりよ押やるもしほ行もしほ、小次郎來れと打連て、幕の内よぞ入給ふ、己が心のだくぼくよ人を埋て平山の武者所荷擔の人と出合の約束、かたへよ打し幕の紋、目覺のめうが巴、わはうな事を企て我身をしらぬ平時忠、跡よ續て梶原平次、幕ゑ立出小手招き一つ所へ寄つどひ、武者所時忠よ打向ひ、先達て景高を以てハ願ひ申上たる、彼經盛へ遣ハされし玉織姫、呼戻して某が妻よせよとのハ事、則今日此所で聟舅の結の盃、外よハ相談の義も有と景高の内意よよつて、是迄推參仕ると、挨拶すれバ打默き、貴殿を聟よ取ハ此時忠も大慶其子細ハ、義經が邪智

よばこり、三種の神器を奪ハん爲卿の君を望しを、何心なく緣を組、神寶をうか〳〵と渡したる今の後悔、義經ハ末〻迄我と同意の者よあらず何とぞ姫を取かへし是成平次かげ高、相聟二人都の守護よ居おかば、禁庭ハ我心の儘、此上もおき悦びと云よ平次ハ去や〳〵り出、ソウ武者所、貴殿も我も娘達を女房よ貰て有ながら、卿の君ハ義經が館よ居らるゝ、玉織姫ハ經盛が西國へ連下れば、兩方ながらおも長な談合、サア其事を此平山もいろ〳〵工夫去てゐると、案じよ時忠打笑ひ、ヤアいや其義ハ何より安い事、經盛と某頃日不中よ成たれば、娘を戻せと云やらば緣切て戻すハ治定、又卿の君が事ハ、コレから〳〵と呼ば平次聞よりぞく〳〵踊、ヘイア奪取とハおちゐ〳〵、幸けふも此所へ參詣と聞し間首尾を窺ひ奪ひ捕ん扨此上ハ義經を亡す術が肝要〳〵、幕の内よて熟談ヤさん、いざと三人立上り、ヘイ平山殿お出なされ、ヲいや〳〵貴樣ハ姉聟マアお出、イヤ先鳥殿かゐ

に入有と俄よ舅智呼ゝり、水の月取猿松共、伴ひてこそ入よけれ、こなたの幕ゟ小次郎ゝ勢ひ込でかけ出すを、待と一聲かけながら義經立出、小次郎、けしからぬ勢ひよていづくへ行やと宣へば、君ゑろしめされずや、此前よて三人が最前ゟの相談、末ゝ君の怨するやつばらかたつぱし打殺し、禍の根をはらゝんと又かけ行をヤレ早まるなと引とゞめ、汝より義經が始終の樣子ゝ知たれ共、軍を出さぬ其内よ、一人でも味方の勢討取ゝ不吉〳〵、又某を亡さんと彼等がいか程もがいても、燈心で磐石及ばぬ事、搆ゝず共捨置と、さも大樣よ宣ふ中、幕の女中聲ゝよ、のふ悲しや卿の君樣に自害遊ゝしたと、さけぶよ義經小次郎も驚さゝぎかけ付れば、にいたゝしや卿の君劍よふして事切給ひ、枕よ殘る一通有、こゝいぶかしと押ひらき見給へば、筆のはこびも定まらず讀も哀のみのあや、誠よに舖へ入しより幾千代迄も末かけて、に情を受參らせんと悅びも仇

夢となる、我親の悪心と見るより心附くよも、聞へを憚りとく〳〵とくり返し讀終り、是非もなし、親の悪事よ心をくるしめ、世を見限りしかも殘念や、死ず共濟べきよ、遁女の細き心傍よ居ながら別れよも我身を耻て詞さへ、かいさず果しか不便やあ、みじかき契りで有しよとやゝは涙よくれ給へゞ、悲しさ增る妹共、血氣よいやる小次郎も俱よ涙よくれ居たる、暫く有ては大將、屹度思案をめぐらし給ひ、小次郎こよと耳よ口、かう〳〵とつど〳〵よ云含よくはからへと計よて、編笠よ人目を忍び、館よ歸らせ給ひけろ、直家い指心得邊を見廻し、卿の君のは立也と高聲よ呼いれゞかたへの幕よい平山梶原よき首尾と夕暮時頻かぶりよ顔かくしけらいよ叩き默き合手ぐすね引て待所へ妹婢付隨ひは乘物を先よ立、小次郎跡よ引添て歩來るを見るよりも、羨かしてよりむらむらと走寄て乘物を、奪ひ捕んとおつ取まく、小次郎すかさず身がまへし、

慮外なるうづ虫めら、忝くも義經公のお臺卿の君のお乘物、狼藉を働て後悔すなときめ付る、ヤ〳〵卿の君知てゐる、四の五のなしよ渡さぬと其前髪首さらへ落すと罵れば、小次郎いたまり乘引ぬいて切かゝるを、こなたも拔連渡り合切結ぶ太刀かげよ、女中い殘らず逃ちつて、直家一人多勢を相手受つ流して戰へ共、遠小腕の云甲斐なく、やう〳〵其場を切ぬけて乘物捨置逃歸る、ヤもふよいい長追すな、いでまあ早ふ繼人のお顏を見んと平次景高、乘物の戸を明て斯と見るか悶りし、ヤこりや死てゐるい、ヤ〳〵やあと時忠も、平山諸共指覗、驚く中よも時忠い添たる一通こりや何じやと、ひらき見るより又仰天、ヤ扨い最前から相談をした樣子を知ての自害と見へた、ハヤはつと計さしうつむき、途方よくれて居たりける、景高いくつたく顏、ヤ埒もない、是いまあどふせうぞいのふ平山、ヤどふといふたらどふせうぞい、ヤ時忠公はお思案いでざりませぬか

思案といふてどふせうぞい、得心で死だれぺねたりよもやいれまいし、此儘で葬禮せう、聟の役よ景高、供をして燒香めされ、いやこれ末重殿も相聟、葬りよ立ずよや居られまい、サア〳〵ござれと誘れて平山へふせう〳〵の佛頂面、時忠へ涙ながら、平山景高、遠路墓所迄ば出ば苦勞千万と、禮狀文句を口上でのべの送りの營と打つれてこそ、露時雨古鄕をやけ野が原と、昂返りて、修理太夫經盛卿一門の人〻と、俱よ都を落汐の搦手をかためんと、福原よといはりて、手配何や萱のば所去ぺし、仮居の事、去げき中ふ養子の玉織姫、軍の事も色事も繪で見た計昧去らぬ行儀育の器量よし女房達と諸共よ、浮世咄の跡や先、越中ノ次郎兵衛盛次が妻の裏葉ひそ〳〵聲よてヤ皆樣、此乱のない先から姫君と敦盛樣云号計でば祝言の遲いのへ、どふした事と尋れぺ、忠清が妻の槇の尾、去たいお姫樣がおぼこで、去かけを待てござる故いつ迄も埒が明ぬ、ちよびくさ

咄しも云かけたり、人のない間よお傍へ寄てつめつても見たり、ば祝言のない先よ内證の祝言ハ濟様よせよや、姫ごせハ立物ぞやおいハいなと、なぶれば姫ハ眞請ゐして、ほんよとうからそふ云たらつゐ夫婦よなられふ物、それ云らなんだそしてまあ、寐てから何といハふやと袖打おほふ其風情、葉の裏よ咲玉椿色を含てかハゆらし、取次の侍罷出、時忠卿方のお使者大舘玄番殿ば出と、知する聲よ女房達ハヤふ姫様、お里の便殿様へ申上んと三人ハ、打連てこそ入よけれ、參議平の經盛卿、時忠の使と聞一家ながら不平の中、いかなる事か云送るとば臺諸共立出給ひ云つ〳〵と座よ直り、時忠卿のお使者、是へ通せと仰の内、頻も形も大舘玄番いかつがましく畏り、主人時忠ヤ越しハ、先達て其元へ遣ハし置玉纖姫、いまだ敦盛殿と祝言もば座なき事、是以て互の幸、存る旨しハへば、ば戻し下されよと主人が口上、則迎ひの乘物も、ようゐ致し參つたり、早く姫

をお渡し有とさも押柄よのべよける、經盛卿の詞を待ずみだい所藤の方、姫君よ打向ひ、ノリ玉織、親ばからゆ迎ひよきたがいぬる氣かいよともないか、そなたの心次第ぞと、尋給へど姫君い、何と返答いい枕、胸もふさがる思ひよて指俯いて詞なし、ホ、返事のないいいよたい氣ぞやの、ア、あぢきないい人心ちいさい時からいつくしみ、手ゑほよかけ育ても身い身で通るといふが誠、暮かゝる平家を捨日の出の源氏よ組ゑ給ふ親ばよ隨分孝行仕やと、涙交りの恨の詞、經盛卿打消て、ハテ、くど〳〵と何を諄、源平と引別れ、互よ心よからぬ中、娘を戻せと有こそ幸、コレ〳〵玄番、お使者の趣承知致し、則娘を返ゑヤと、立歸つて達すべゑ、其方迎よ參りゑ上い、此方ゟ人よ及ばず、早く姫を連歸れと、仰よはつと大館玄番、玉織姫の傍よ寄、ハテ、姫君何をうぢ〳〵隙入給ふ、時忠のお心い呼戻すと其儘嫁入のば相談、コレお悦びなされ、其聟殿といふい、平山の武者所末重とて源氏の兵

姉聟の義經殿と肩をならべる大大名、あやかり者といお前の事、サア〳〵早う乘物よお乘なされと立寄中、姫いとかうの諾なくずつと寄て玄番が刀拔手も見せず切付れば、肩先ずつぱと切込れ是ゝと寄を又一太刀、うんとのつけよ倒るゝを、飛かゝつてとゞめの刀さゑもの經盛仰天よ、藤の方ゝ走寄、ヲヤ、玉織、れき〳〵の武士も及ぬ手際心の健氣、サア〳〵こちへと誘ひて、女心のはしたなう、いふて今さら恥しい、其心を見る上ゝ、ハヤ、テ、成程とは夫婦ゝ默き合て藤の方、コレ玉織、そなたよ見せる事が有、待て居やと云捨一間よ入給ふ無官の太夫敦盛ゝ父と一所よ出陣の、用意取ゝある中よ、母のゑらせよ奥の間なは用いかよと出給へば、跡なみだい女房達銚子土器携て、君ゝ千代ませ聟君ゝ三國一と祝しける、樣子ゑらねば敦盛ゝ、恠りうろ〳〵あたりをながめおゝすれば、經盛ゝ取あへず、敦盛卿、玉織姫と、婚儀の結び、其盃を取上られ姫へさして壽をと、聞より

染衣打笑ひ、予殿様には祝言の盃ゝ、姫ごせを呑初て、夫へさすが世上のならひ、思召忘れの様よ存ます、ゝゝと袖覆へゞ、經盛卿打默頭せ給ひ、女房の盃を夫へさし、壽を祝ふ下つかたの婚禮ゝ其通、譯を云らねゞ不審ゝ尤、幸の折柄なれゞ語聞す事有と、いひつゝ立て敦盛のに手を取上座よ直し、其身ゝ次よ座を改め、口外へ出さねば知人有まゞ、そも此敦盛卿ゝ、我子よて我子よあらず、元此みだい藤の方ゝ、法皇よ宮仕へ、に寵愛ふかうして、に胤を身よやどせしが、人の妬の強けれゞと、先祖平の忠盛へ、白河院を下されし祇園女にの例よ任せ、懐胎の身を其儘、某が宿の妻よ給りて出生有し此敦盛、我子として育しが、院參の折ごとよ、人なき間よゝいもが子の歌よよそへてに尋、淺からぬにいつくしみ、かく由緒有敦盛なれゞいか成高位高官も望のごとく成べけれ共、官位を受てゝ臣下の列重て帝位をふむ事叶ゝず、かくに寵愛ふかき敦盛、まさかの時ゝ春

宮よも立給いんは心やと、叡慮をはかり今日迄態官位の望もせず、扨こそ無官の太夫と、呼せしぞや、斯物語る上からい、其土器い天盃同前、流を汲で玉織姫三〻九度を納むべしと仰を蒙のゑたいりよ千代を結びの番蝶、祝ひ納る姫君の心の内の嬉しさい早う其日の暮たからん經盛詞を改て、敦盛卿へ願ひ有、都騒動の折柄、法皇は幸のは行衛い知ず、は身を殘しとゞめても襲來る源氏の軍兵うきめや見せ奉らんかと、心あらず一門と諸共是迄伴ひヤせし事嘸や跡よて法皇の叡慮くるしめ給いん勿体あや、其上今度の合戰い、必定平家滅亡よて、一門殘らず討死せば、都へ伴ひヤ人も有まじ、は身い是より藤の方と、玉織姫を具し給ひ、都いいまだ騒しからん、暫く北嵯峨へは入有、折を見合せ法皇のは殿へ移り給ふべし、今生の對面も今日限の經盛、暇乞よは顔ばせ見せもし見もしなされよと、涙よくれて宣へばみだいとからの詞も涙玉織姫女房達、驚計

うつとりと顔見合せて居たりけり、敦盛大きよ恐れ入、存寄ぬ父の仰、生れぬ先から親子と成、けふ迄は恩を受し事須彌蒼海も競たらず、譬いづれの胤よもせよ、後の親こそ親おらめ東西覺て今日迄は意を背し事なけれど、是計りは免有、一所よ出陣仕り、は馬の先よて潔うは恩を送らせ給へれと涙よくれてのは願ひ、經盛卿押かへし一旦の義心尤なれ共、親の恩と、天子のは恩一つよ云も恐れ有、是非は承引なきならば法皇への〻譯某へ切腹と面色かへれへ敦盛卿、誤り入奉る此上へ仰よ隨ひ兎も角も仕らんと、都へ歸り給へんとな、ホ、承引有て嬉しや〳〵、源氏の勢へ丹波路と、津の國の街道方二手よよすると聞及ぶ、敵の見ぬめの浦傳ひ、難波大江の岸を越、河内路方登給へ早ふ〳〵、畏て敦盛へ用意と一間へ入給へへ、藤の方玉織も旅の支度を急れよ、ヤアコリヤ〳〵、染衣皆の者取賄ひよひい〳〵と、仰よみだいへ、お玄やと皆引連て入給ふ、經盛悦喜

限りなく、サア心安し是からハ一の谷へ馳向ひ、持口を固めんと獨言ゑて おハする所へ、内府宗盛の使として雜兵一人馳來る經盛卿へ過急のほ用と一通を指出せハ何事やらんと押ひらき、何ゝ三くさの合戰味方敗北是よ依て主上を始、門院二位殿密よ讃岐八島の浦へおひらき有、貴殿ハ船を守護との仰よよつて迎ひの兵船指遣ハす、急ぎ出立有べき由、讀も終らず心せき立、サア事急也猶豫ならず、兼て妻子よ別れハ告る、再び逢も互の輪廻、此儘よ出行ん案内せよと使を引連、急ぎ濱邊よ出給ふ、かくとハゑらず、藤の方けふ別れていつか又、逢見ん事ハかた糸の結び馴よし夫婦の緣せめて名殘を惜んと、座敷をそつと立出て、經盛卿我つまと尋給へど面影ハ見ぬ隈ゝを爰かしこ見廻す中よ落たる一通ひらき見るより悔りし、コレ〳〵皆の衆早ふ〳〵殿ハ出陣あされたハいのと、呼ハり給ふほ聲よ、玉織姫女房達、追ゝよ走出一つ所よ寄集り、互よ顔を見合

て忙れ果たる計也、かゝる折節奥庭ゟ間近く聞ゆる轡の音、何事やらんと見る所ゑ敦盛其日の出立ゑゐ、雛鶴縫たるひたゝれゑ、鎧ゐ緋威同じけの鍬形打たる兜を着て、廿四さいたる染羽の矢、重藤の弓を持いさみすゝんで乗出し給へゐ玉織見るより帯引ゑめ、小づまかい取かい〳〵ゑく、なげしゑかけたる長刀追取、母様さらぐと庭ゑ飛ふり、轡面ゑ引添たり、みだいゐ驚き ャア〳〵 敦盛都へ登れと父の仰其出立ゐ心、得ずと、尋給へぐおろかや母上、父の命ゑ従ふゐ一旦の孝行、兄上達一門殘らずかぐねをさらす必死の戰場我一人都へ歸り何面目ゑながらへん是ゟ一の谷へ馳行、父ゑかゐりて陣所を固め潔う討死ゑて、名を後代ゑとゞむる覺悟親ゑさき立不孝の罪ゐ赦されて下さりませと思ひ込だる其有様母上思ゐず両手を上ャレでかゑやつだ敦盛、それでこそ我子なれゃ、嬉しいぞや〳〵、いで餞別を祝ゐんと、召たる襠ひらりと脱惣じて軍ゑ立時

ハ、敵ヨ矢種を隱す爲母衣をかけると聞傳ふ、是をかけて出陣仕やと、心の内ハ筐ぞといハぬ情や母の衣、やなぐゐヨ打かけ給へバ芳志有がたし〳〵、コレ〳〵玉織、跡ヨ殘つて我ヨかハり母上ヨ孝行有、戰場へ連行事ハ叶ハぬと宣へバ、姫ハわつと泣出し、年月待た夫婦の盃、かハす間もなくふり捨て、殘れとハどうよくあ、わたゑやどこ迄も付て行、邪魔ヨ成なら今爰で、おまへの手ヨかけ殺してたべ、なんぼうでも離ハせぬと、鞍ヨ取付鐙ヨすがり歎ゑたふぞいぢらしき、未練なりそこ放されよと、あせり給へバみだい所、敦盛一門の人〻も皆妻や子を具し給へバ大事ない、連て出陣〳〵と、聞より姫ハ有がた涙、母の方を伏拜暇乞さへあら駒の、手綱ヨ引添いさみ立、女房達も取〻ヨ見立ヤせバ敦盛卿時刻移ると鞭ふり上、然らハ母上もふおさらバ、ヲ、さらバ、〳〵の別れの聲も母の耳ヨハきつと立、駒のいなゝき轡の音あをり立てゞ打せらる、跡見

送りて藤の方こらへ〳〵し溜涙、一度よわつと聲を上どうと、ひれふし給ふよ、女房達走寄いかゞ渡らせ給ふぞと、樣ゝいたはり參らすれば、みだいゝ涙の顏を上、悲しい物ゝ浮世の義理、敦盛計此母が臆病よ育し故、軍よも得立ぬとさげしみが口おしさ、討死よ、やる母が思ひ、十五や六の小腕といひ、稚い時から舞樂を好、軍の事ゝ去らぬあの子、つゐ殺さるるゝ知た事、鎧兜を着て出たのが千騎万騎を討取て、ぶん取高名去たも同然、わけてかゝいや玉纖が、歌の會か香きくよ行やうよ跡を追、いた心根がいぢらしい、やるまいと思ひしが夫婦と成た去るしよゝ、一夜の枕もかゝさせたく、二つよゝ敦盛が妹脊の緣よひかされて軍をまどめてゐるならば一日でも討死の便を遲ふ聞ふかと、はかない事を心の頼親の因果と計よて、身を投ふして泣給ふ、槇の尾裏葉染衣も、めい〳〵夫の行衞迄、思ひくらべて一時よ又もや、袖を去ぼりける、歎きの耳を驚かす

ゑい〳〵聲よ人〻ゝ、すゝや敵こそ入たれとみだいを奥へすゝめやり、通路の鈴の綱引ちぎり、てん手よたすきよかけ置たる、長刀大太刀小太刀をかまへ、恐れげもなく待かけしゝ、道名よおふ平内左衛門越中かづさが妻女とゝ、いゝねどゑれてかい〳〵し、時もあらせず入來るゝ平山が郎等成田ノ五郎、大勢引具し大音上、經盛ゝいづくよ有、主人平山の武者所末重、時忠卿と相談有玉織姫を取戻し、他人と成て經盛一家、討亡ぼせとの仰を受成田ノ五郎向ふたり、急ぎ玉織姫を渡し覺悟せよと罵れば、推參なる小二才め、敦盛卿の簾中よ定まつた姫君樣武者所でもむゑやくゑやでもけもない〳〵やる事ならぬ、長居せぱめよ物見せん早く歸れと呼ゝつたり、延過たげんさいめ、かたつぱし打殺せと、下知よ隨ふけらい共扱連〳〵切てかゝれば、心得多勢を相手よしてひるまずさゝず三人が、鯲手かくなゝ十文字、或ゝ大げさ車切太刀長刀の稻妻よ、ゑ

ずや叶いぬといふやいな主もけらいもわれよ、表をさして逃出るをのがさじやらじと追て行、跡よみだいいてれのふ〳〵、長追無用あぶないと、あせりながらも油斷なく、一間よ餝し弓と矢つがい、立出給ふ折も折、取てかへす成田五郎、かけ向ふ出合頭切て放せばあやまたず、胸板はつしと射ぬかれどうと倒れて死たるゝ、云合せたるごとく也、追ゝ歸る女房達此體を見てお手がら〳〵、あゝれ成田が身の果とどよめく所へ又むら〳〵、討もらされの家來共主人の敵と込入を、イヤ面倒なと三人がまくり立たる太刀先よ、刃向ふ者も嵐の木の葉ちり〳〵ばつと逃ちつたり、女房達聲〻よ、サア〳〵やみだい樣、此浦船よ打乘て八島へ渡り殿樣よ、尋逢せ奉らん、又も敵のこぬ内よいざゝせ、給へといさみ立、すゝめやせどつまや子の別れ思へば便なく足も、もつるゝ藤の方、涙よ袖を染衣が、いさんで見せる心ゝ裏葉、げよ武士の女房よ敵も舌を槇の尾とふり、返つ

たる女武者みたり、四人が打連て、あゆめど跡へ引戻す、濱の眞砂路つきせぬ思ひ通ふ、千鳥の浦傳ひ船場の、磯へと急行

○第二

酒極る時ハ乱る、樂しみ極る時ハ悲しむとかや、廿餘年の榮花の夢跡なく覺て都をひらき、平家の一門楯籠る、須磨の内裏の、要害、前ハ海、上ハけハしき鵯越、追手ハ生田搦手ハ一の谷の山手ゟ、浪打際迄柵ゆい廻し、赤旗風ゟ吹靡かせ、參議經盛の末子無官の太夫敦盛、父ゟ代て陣所をかため事嚴重ゟ見へゟけり、比ハ彌生の初つかた、月さへ入てくらき夜ゟ、熊谷が一子小次郎直家、先がけして初陣の高名を顯ハさんと出立姿ハ澤瀉を、一しほ摺たる直垂ゟ小櫻威の兒鎧猪首ゟ着なす星兜星の光りゟ只一騎心ハ剛の武者草鞋足ゟ任せてはやりをの、山道岩角嫌ひなく、一の谷の西の木戸陣門ゟ走つき、一息ついで四方をながめ、嬉しや我よ

り一番よ先がけする者もなし、跡ゐ人のつゞかぬ中切入んとかけ廻れど、乱杭さかもぎ透間なく嚴しく戸ざす陣所の門、いかゞいせんと見廻す内、遥の奥よ管絃の音、夜い深更よ及んだり、折節山路よ風もやみ海上も波ゑづまれべ、ぎがくのゑらべ哀れげよさも面白く聞へけり、小次郎い思はずも心耳をすまし聞とれて、アツア實も上臈都人い情もふかく心もやさしと父母の物語、今こそ思ひ合せたり、かゝる亂れの世の中よ、弓矢さけびの音いなく糸竹の曲をゑらべ詩歌管絃を催さる、ハヽア床しさよ、いかなれべ我ゝい、邪見の田舍よ生れ出、鎧兜弓矢を取、かくやんごとおきゝ人ゝを敵として立向ひ、修羅の劍をとぐ事い淺間しさよと計よて覺へず涙をながしたり、まだうら若き小次郎が、身の程ゝを汲分て感ずる心ぞゑほらしき、後の方よ蹄の音、誰おるらんと窺ふ内、平山の武者所馬上ゆゝしくかけ來り、小次郎が影見るよりも、敵か味方かいぶかしく何者

成ぞと聲かくれば、小次郎もすかし見て、未重殿かさいふ和殿ハ、コハ小次郎かと馬よりおり立、我方先へ來る者ハよもあらじと思ひしよ、心がけ神妙〳〵外の人なら平山が先陣を爭ふて一番よ乘入んが、初陣の健氣さよ先陣を汝よ讓る、氣遣なしよ切入〳〵、イヤなふ平山殿、あの管絃の音は聞なされ、扨も雲の上人ハ又やさしさが違ひますの、イヤサ夫を和殿ハ得知まい、昔諸葛孔明が司馬仲達よ押寄られ詮方つき、櫓よて香を炷て悠〳〵と琴彈て居るを見て謀もあらんかと我智惠よ迷ふて仲達ハ逃しと聞、アレあの管絃も其通り何怪しむ事ハあい早かけ入て高名せよ但和殿が醜しくば某が先陣せうか何と〳〵と氣を持され、血氣よはやる小次郎直家、木戸口よ走寄門打たゝき大音上、敵の陣へ言ヤさん武蘆國の住人志の黨の旗頭熊谷ノ次郎直實が一子同苗小次郎直家先陣よ向ふたり、平家方よ名有人ゝ出あふて勝負有と高らかよ呼ハれば、門内ゟ

騒立、すゝや敵の寄たるぞ、出向ふて討取と、木戸押ひらけゞ小次郎ゝ太刀抜かざしかけ入を、ソレ遁すなと軍兵共俄よさゝゞ鯨波、太刀音人聲かまびすし平山いかゞとためらふ所へ、熊谷、次郎直實我子の先陣心よてつし足を空よかけ來り、平山殿しゝな、世悴小次郎見給ゝすやと尋を待ずされゞ〳〵、最前是へ見へし故小次郎よ色〻段〻あの大勢の敵の中へ一騎打ゝ叶ゝぬぞや、ひらよよしに召れ後詰を待ての事がよかろといろ〳〵よいさめてもはやり切たる若者無二無三よ切込れしと聞より直實髪逆立子を失ひし獅子の勢ひ敵の陣へかけ入たり、爰やかしての鬨の聲聞よ平山獨ゑみ、思ふたつぼ〳〵、親子共よ袋の鼠今の間よ討れおろ日比からあの熊谷めと六彌太めが出頭をくゝ〳〵と思ふて居たよ、ヱ、時節も有ゞ有物、手を濡さず風の神よりよい敵、其上親子も剛の者、死物狂ひと働かゞよつぽど敵もなやましおろ、あらでなしさせ討

死ざし、其跡へ去かくれゞ高名手がらい思ひの儘うまいぞ、〳〵、〳〵と
ぞく〳〵いさみ悦ぶ所へ、木戸口よあまたの人聲、敵ぞと身がまへし
窺ひ居るもくらまぎれ、熊谷次郎直實我子を小脇よひんだかへ、陣門を
ずつとかけ出、平山殿おいするか、躰小次郎手を負たれゞ養生加へよ
陣所へ送らん、お手がら有と云捨て飛がごとくよ急ぎ行、平山案よ相違
して油斷ならずと馬引よせ、打乘間もなく門内よりあまたの軍兵拔つれ
て、我討留んとかけ出れゞ、心得たりと拔合せ、受つながしつ多勢を相手
火花をちらしいどむ内、無官の太夫敦盛い、さいやかよ六具をかため駒
をすゝめて乘出し、平山を見るよりも、まつしぐらよ打寄給へゞさ去つ
たりと渡り合去ゞしいさゝへ打合しが、先を取れし武者所、殊よ多勢よ
取まかれ、憶病神の誘ひてや駒の頭を引かへし行先去らず逃出せゞ、
きたなし返せと聲をかけいづく迄もとあをり立跡を、去たぶて追て行、

敦盛様ア太夫様いのふ、此くらいのよ只お一人、あぶないいのふお歸りと、いへどあてども波ちかき、磯ばたをうろ〳〵と袖い涙の玉織姫、夫を尋隴夜よ心細身の一腰かい込、あなたへ走こなたへ迷ひ、すまの浦邊をそこよ、爰よと尋さまよひ給ひけり、早玄のゝめよ人顔も、ほのかよ見へし山道ゟ平山の武者所、漸〳〵逃のびすまの浦、駒の足を休めんと暫く息をつぐ中よ玉織姫と見るよりも、やがて馬より飛でおりつか〳〵と立寄て、コレお娘、チモよい所で出合ました、いつぞや京で見初てから目の先よちらつくやうで、起てもねても忘られず、思ひ餘つて、そ様の親ゟ時忠殿へいふたれば、やらふと有を幸よ迎ひよやつた其跡でも、ア、木娘なら玄ゆつながろ、ヱアねてからどふしてかふしてと、ほんよ〳〵どこもかも木のやうよ成て待てゐたよ、迎よいた玄番を殺しよう待ほふけよめさつたなふ、サア乘物のかゝり此馬よ乘、連ていんで女房よすると、引立れいふり

はなし、エ、あたいやらしい親が赦そがどうせうが、敦盛様とい二世の約束、かういふ内よもは行衛を尋逢て死ゞ一所、邪魔仕やんなとかけ行をひんだかへ、ふ、敦盛を尋るのか、コレなんぼ尋ても敦盛の行衛水の底迄有所ハ去れぬ、そりやなせよ、チ、敦盛ハたつた今我手よかけ討て仕廻ふたヤア、あんと、敦盛様を討たとや、ハアはつと計よどうとふし、人目もわかず聲を上歎去づませ給ひしが、夫の敵と身がまへし切付る腕首掴んでヤアこいつ手向ひか、了簡ならぬといふ所をいハぬ、ても此手のやハらかさ去ん去やうな事かいなモどふも〳〵、エ、武者震ひのする程どふもならぬ、コレ悪い合點去や、とんと心を入かへ、おれよ隨ふ氣よあら去やれ、女房よ持てかハいがるサ、どふか〳〵と猫なで聲、姫ハいかりの涙まじり、コリヤ世が世ならそちが様なむくつけな侍ハ傍邊へも寄付ぬよ隨へのなびけのとハ纖ハしい、いまハしい、エ、腹立やと又切付る、腕首捻上取ておさへ

調ヅ女房よ成かならぬか、いやなら殺すが何と〳〵と、太刀拔持て傍若無人、き、殺さゞ殺せ畜生め、こゝ、誰ぞ強い人が來て、こいつを切てくれぬかともだへ、給ふぞいたゝしゝ強氣の平山むつとせき上ヤ、よつくい女め、なびかぬ上よ色〻の雜言、耻面かゝされ堪忍ならず、生置て人の花と詠さすもむやくしい、思ひ知と持たる刀、胸板ぐつと突通せゞ、あつと一聲苦しむ折から、後の方よ鯨波ずゝ又我を追くるやと、駒を引寄飛乘て逸散よ其場はるかよ落失けれ、去程よ、ゝ船を始て、一門皆〻舟ようかめゞ乘おくれじと、汀よ打寄れゞゝ座船も兵船も、遙よのび給ふ、無官の太夫敦盛ゝ道よて敵を見失ひ、ゝ座舟よ馳付て、父經盛よ身の上を告知らす事有と須磨の磯邊へ出られしが、舟一艘も有ざれゞ詮方波よ駒を乘入沖の方へぞ打せ給ふ、かゝりける所よ後より熊谷ノ次郎直實、チ、ィ〳〵と聲をかけ駒をはやめ追かけ來ヤアそれへうたせ給ふゝ平家の大將軍と見奉る、

まさなふも敵よりしろを見せ給ふか引返して勝負あれ、斯ゆ某ハ武藏國の住人熊谷次郎直實見參せん返させ給へと、扇を上て指招き暫く呼ハつたり、敵よ聲をかけられて何か猶豫の有べきぞ、敦盛駒を引返せば、熊谷もすゝみ寄、互よ打物拔かざし、朝日よかゞらく劔の稻妻かけ寄、かけよせてう〳〵、てふの羽がへし諸鎧駒の足並かつし〳〵、かしこハ須磨の浦風よ鎧の袖ハひら〳〵、むれいる千鳥村千鳥むらむらばつと、引汐よ寄てハかへり、返りてハ又打かくる虛ゝ實ゝ、勝負も果し有ざれば、いそふれ組んと敦盛ハ打物からりと投給へば、こハ之はらしゝと熊谷も太刀投捨て駒を寄馬上ながらむづと組、ゑひ〳〵の聲の内、互よ鎧を踏はづし兩馬が間よどうと落ずハやと見る間よ熊谷ハ敦盛を取ておさへ、かくは運の極る上ハ、は名を名乘直實が高名譽を顯ハし給へ、又今生よ何事よても思ひ殘すは事あらば、必達し參らせん、

仰置れしへと懇ろまぞ、敦盛御聲さいやかに、やさしき志敵ながら、適勇士、かく情有武士の手にかゝり死せん事生前の面目戰場に赴より、家を忘れ身を忘れ兼てなき身と知ゆへに、思ひ置事、さらになし、去ながら忘れがたきは父母の恩我討れしと聞給はゞ嘸は歎思ひやる、せめて心を慰む爲、討れし跡にて我死骸、必父へ送り給はれかし、我こそ參議經盛の末子、無官、太夫敦盛と名乘給ひしいたはしさ、木石あらぬ熊谷も見るめ涙にくれけるが、何思ひけん引起し鎧の塵を打はらひ〳〵、此君一人助し迚勝軍に負もせまじ、折節外に人もなし、一先爰を落給へ、早う早うと云捨て立別れんとする所に後の山方武者所數多の軍兵、ヤア〳〵熊谷平家方の大將を組數ながら助るは二心に紛れなし、きやつめ共に遁すまじと聲〻に罵るぞ熊谷はつと計いかゞはせんと默然たり敦盛卿宏とやかに、迚も遁れぬ平家の運命爰を助り行先にて下主下郎の手に

かゝり死耻を見せんより早くは身が手よかけて、人の疑ひはらされよと、西よ向ひて手を合せ、は目をとぢて待給へべいたゝしながら熊谷ゝは後よ立廻り、彌陀の利劍と心よ唱名、ふり上ゝ上ながら玉の樣なるは粧ひ、情なやむざんやと胸も張裂氣おくれよ、太刀ふり上し手もよゝり、思ひよかきくれ討兼て歎よ時も移るよぞ、ア、おくれしか熊谷、早く首を討れよと、捻向給ふは顏を見るよ目もくれ心きへ、躰小次郎直家と申す者てうど君の年恰好、今朝軍の先がけして薄手少く負たる故、陣屋よ殘し置たるさへ心よかゝるゝ親子の中、それを思へべ今爰で討奉らべ嘸やは父經盛卿の、歎を思ひ過されてと、さしるよ猛き武士も、そゝろ涙よくれゐたる、ア、愚や直實、惡人の友を捨善人の敵を招けどゝ此事、早首討てなき跡の回向を賴むさるなくべ生害せんとすゝめられア是非なしとつゝ立上り、順緣逆緣俱よ菩提、未來ゝ必一蓮託生、なむあみだ佛南無あ

みだ佛首い前よゞ落よけり、人の見るめも耻しとゝ首をかき抱き、曇し、聲をはり上て、平家の方よ隱れなき無官の太夫敦盛を、熊谷次郎直實討取たりと呼いるよゞ磯よ臥たる玉織姫絶入し氣も一筋よ、夫をゑたふ念力の耳よ入しかむつくと起、ゑゞし持てたべ敦盛樣を討たとい、いかなる人かゝうらめしや、せめて名殘よゝ顏を、一目見せてといふ聲も深手よよいる息づかひ、見るより熊谷ゝ首携わゆみ寄、敦盛をゑたい給ふいいか、成人と尋れゞ、今いの苦しきこいねよて、我こそい敦盛の妻と定まる玉織姫、お首いどこよ、エ、もふ目が見へぬゞ撫廻せゞ、ゝ何お目が見へぬとや、ヤ、いとしや〳〵、ゝ首い コレ〳〵爰よ〳〵と手よ渡せゞ、わつと泣ゝゑがみ付、膝よのせ抱ゑめて消入絶入歎しが、これ敦盛樣、ァはかない姿よ成給ふあふ陣屋を出させ給ひしよりゝ跡ゑたい方ゝと、尋る中よ源氏の武士、平山の武者所、我を見付て無体の戀慕だまし討んも女

業此ごとく手よかゝり二人が二人で悲しいさいご、せめて別れよは顔が、見て死たいと思へ共深手よ心が引入て、目さへ見へぬか悲しやと、又は首を撫さすり、宵の管絃の笛の時後よと有しは詞が、今生後生の筐かや、此世の縁こそ薄く共來世でゝ末ながう、添とげてたべ我つまと、顔よあて身よ添て思ひの限り聲限り、なくねゝすまの浦千鳥涙よひたす袖の海、引汐時と引息のちゑごと見へて絶果たり、熊谷ゝ忙然と、どちらを見てもつぼみの花都の春より去らぬ身の今魂ゝあまさがる、鄙よ下りてなき跡をとふ人もなき須磨の浦、なみ〳〵おらぬ人〻の成果る身のいたゝしやとひたんの涙にくれけるが、是非もなく〳〵玉纖のなきがらを取おさめ、母衣をほどいて敦盛の、は死骸を押つゝみ、総角取て引結び、手綱をたぐり結付る、鞍の鹽手や去ほ〳〵と、弓手よは首たづさへて、右よ轡の袁げよ檀特山のうき別れ悉陀太子を送りたる、去やのく童子

が悲しみも同じ、思ひの片手綱涙ながらに「歸りける昔より爰も名にお
ふ津の國の菟原の里に幽なる垣生の宿に獨居の、林い老の惱に糸針取
て人爲業つゞりさせてう洗濯の、粉かい物を打盤の、手元も暗き黄昏時、
世のうきに、いさゝめならぬ身の願ひ、忍びて人につげ櫛の薩摩、守忠度
い俊成卿の館か、須磨の陣所へ歸らんと急ぎの道も行暮て、やどりもが
なと爰かして、あれし軒端もまばら成、ふせやの門に立寄給ひ、都方か西
國へ歌修行の旅の者、案内もえらぬ道に勞れ、日も暮たれば迷惑致す、卒
爾ながらお宿のぢ無心、賴入と有ければ、ハテ、いや爰い所の法度にて人宿
い致さぬ共、我も人も行暮て宿のないなんぎお物殊更詘しき歌枕、ぢ
修行のお方と聞ば別條も有まい、宿いせず共、マアはいつて、たべこでも參
りませと、戸口を明て、ハアおまへいどふやら見た樣なお方爰やが、ヲ、それ
よ前方都でお目にかゝつた忠度樣でござりますお、ゝ、そなたい五條の

三位よ居た、菊の前の乳母でないか、成程〳〵めづらしや、お久しや、先こなたへと伴ひて、上座よ直し手をつかへ、何か指置お尋ヤませうい、此度源氏の軍勢、平家を貴んと都へ乱れ入よ付、此一門殘らず西國へ落させ給ふと承いりましたが、お前計何として今迄都よいでざりました、其子細い兼てそなたも存る通り、某い俊成卿の和歌の弟子といひ、分て存たしき中なるが、此度師卿撰れし千載集よ、我讀歌を加いりなゞ譬歟の手よかゝりかゞねい野山よさらす共、此世の本望敷嶋の道を求しかいならんと、思ふ心の一筋よ、狐川ゞ引返し、俊成卿の舘よ立越願ひしが、かゝる時節よ平家の詠歌、私よ加へん事もいかゞと、息女を以て尋の爲源氏方へ送られしが、いまだ其沙汰なき内よ、早合戰最中と聞心せかれて立歸る、生田の陣所も程ちかしといい云ながら、暮よ及べゞ陣門もひらくまじと、此所へ立寄しもふしぎの縁と宣へゞ、されゞわたしも稚な

じみの夫が不所存、置去まして行衛知ざる折から、縁を求て後成様へ乳母奉公、養君菊の前様に成人まで付に暇申、かゝるべき躰も有たれど、性がわるさまに勘當致し、今獨身の貧樂と應せぬ苦勞いでざりませぬが、承れば、おまへと菊の前様い、どふやら譯の有、いや私まに遠慮いない事、夫まで付てお咄申す事も有どこゞやおつての事、まあ〳〵遠路のお草臥、あれへでざつてを休と、いふも詰しき饗まで、貧家の塵も繕いぬ主が案内まで打連て、一間まこそい入給ふ、まだ宵あがら、かきくもる空も心もくらぬ紛れ、うそ〳〵窺ふ大男、枳穀の生垣押破りぬつとはいつて揚口納戸へ去かける指足ぬき足、忍び込間まで主の林物音聞付立出て窺ひゐる其まゝすまも顔袋まで入し一腰かい込そろり〳〵と表の方出んとするを、待と、聲かけられて恟りし、逃行所を飛かゝり、むゑやぶり付て引戻せば、逃れんやらじと摑付、引ぱるはづみまで頬かぶり脱て落たる顔見付、わゞ

や太五平ぇやないか、ァ、これ〳〵母ぇや人、聲高ぇいぃぇやんな、盗人を捕て見れば我子也けりぇや、人がぇつてぃおれよりまあ、こなたの外聞が悪いわいの、デモ扨も憎やの〳〵、儕が様な性の悪いやつが有ふか、ハテ有ばこそ酒も飲ます、色事ぃてつち任せ、三絃もちつくりかぇるてや、喧嘩もめつたぇ前先の見へぬ事ぃせず、又これ〳〵もあんまりぇじぇかすりぃくいませぬぃいの、ァ、慮外あがら万能ぇ達した男、サァ其悪い事が積つて親ぇ様ぇ難儀をかけ、妹娘を勤奉公ぇやつたも皆儕故、まだ其上ぇうぃぬりかけ、盗する様ぇ成たぃ、よく〳〵因果な生れ性、そしてまあ外でも有事か、親の内へ盗ぇはいると、ァ、これ〳〵てあたもほんぇ年ぇ似合ぬまだな事いぃぇやるわいのコレ他人の所へはいるとの忽此首がぢざらぬぃいの、そこで若見付られても命ぇ氣遣ひのない様ぇ、高をくくつて親の内へはいつたぃ、我子ながらもァ、發明あ者ぇやと譽てぃく

れいで、何ぞややらぐと〳〵〳〵と、愚痴な事計いゝ云やるゝいの、コレそんな事聞きや氣が盡ますと、いひつゝ腰のすつぽんから有あふ茶碗へどぶ〳〵〳〵、ソレそれ〳〵其酒が止ぬから發つて横着な氣も出るゝい、コリヤやい、見るかげもない此母がな、人爲業云て漸と其日を送れば、いかな〳〵一錢の貯も、サア有てたまる物かいの、あい事ゝおれがよう知てゐる、云やよつて錢銀の望ゝない、コレ此一腰がほしさよ、イヤそりやならぬ、といゝ云やるゝ、エ、親父殿が殘し置れた重代といふ事か、サアそれ云やよつてよう切れふと思ふて、盜心ゝ、商せうよも望姓ゝなし、仕憂た職もなければ、八足廻しの茂次兵衞所よかゝつて居て、歩荷持云ても、儲よくい物ゝ錢云や、夫よ毎日飯代を拂よやならず、三文でも餘つた時ゝかたかゝくんでやつてのける、是云や濟ぬと思ふからふつと氣の付たゝ、今源平軍の中、うそ〳〵と見廻つて拾ひ首でも云たら知行よ成まい物で

もないと、思ひ付いて付ても是も丸腰でいならぬ業爲、夫で此刄物を盗と
いふ物の、親の物い子の物ぞや、コリヤ貰ますぞや、アレまだのぶとい事計、子
なれやれどわりや、勘當ぞたりや他人ぞやいい、そんなら借ます、イヤな
らぬと、せり合中へによつとくる、人足廻しの茂次兵衛が、ヘア太五平爰よ
か、ばさま何やらせり合ぞやるが、ア、扨い勘當の詫を聞まいといふ事か、
イヤなふ詫所ぞやでざらぬ、やつぱり性根が、ア、コレ〳〵直らぬといいれま
い、おれが世話よしてからめつきりとよう成ましたぞや、もふ了簡して
やらつぞやれ、コリヤ〳〵太五平、うつかりとしてゐる所ぞやない、此度の軍よ
付て弓持の鎗持のと大分人歩が入故、それ〳〵の人をせんさくしてや
つたが、まだ旗持がたらぬ故そちをやらふと思ふて一遍尋た、外の事よ
り辛道いせいで、ア賃がよいがいかぬかと、聞て林が早氣づかひ、賃がよ
うても軍場い命がけ、こりやよしよぞたらよかろ、ヘアやくたいもない、高

が命よ氣遣ひがあれば、雇れる者い一人もでざらぬ、あつちの手人と違ふて、道具持い切合の勝負いせず、若流矢でもくれば楯の後へちやつと隱れる、ばさまゐいか、鎗長刀がひらめけば、人の後へちやつとかゞむ、とかくちらほら氣轉きかして立廻れば、怪我する事い微塵もおい、ほんのこけおらすといふ物ゑや、其段い此茂次兵衛が受合、コレ即先樣からきた、丈夫お裝束見せまゑよと、風呂敷ほどき取出すい、雜兵なみの陣笠鎧、見るよ太五平ぞくつき出し、そりやおれが望所ゑや大勢よ打交りゐいゐいわいがいふて見たい、ヲ、ヲそんならちやつと身拵へとてん手よ帶とくどんざぬぐ、ゑばんの上よ黑革の鎧上帶をつかとゑめ、一腰さすが侍の小手脚當も似合たと、陣笠着て、コレ太五平、そちい先樣知まいから、嗅よ所をチット合點母者人、ヲ、そんなら太刀の折紙を、添てならふと納戸ゑ、取出し渡せば添い〳〵、コリヤ怪我すなよ、ヲ、夫もよい〳〵此形も、よいよいやな、よ

い、よいやな、よい〳〵〳〵よいやな、身ぶりの練物見るごとく、いさみすゝんで、「こその急行、林の跡を、打ながめ、かたのな子がかのゆいと、有様の不便よこざる、とよもかくよもお前のお世話、添ふでございます、お禮がてらよ酒一つ進せたいが、奥よの爲業を取ちらして置ました、納戸で成とまいつて下され、イヤそりやは無用、ハテ買ての進せぬ餘所から貰た諸白よ、鰯の肴でたつた一つ、是非よ〳〵と無理やりよ、納戸へ押やり勝手から、銚手盃持行も、子故のあいそとえられたり、風さそふ道の時雨も、戀ゆへよ、身の濡鷺の菊の前、走付たる一家の、門の戸けのしく打たゝき、明て明てと宣へば、林の聞付誰ぞや〳〵、イヤ大事ない者ぞや、大事ない者との、ハテわしぞや、菊の前ぞやのいの、スリヤお姫様との心得ぬと、庭よかけおり戸を明てほんよそふぞや、まあ〳〵お入遊ばせと、いふ中もどふやら氣つかひ、見れば付添人もなし、何としてよ入てお一人お出なされたぞ、

さればいの忠度様の遊びした、お歌の事よとやかくと隙取内を待兼て、お立有しと聞と早跡を去たふて、出たれ共心よ任せぬ女の足、爰迄來ても追付れぬ、道い去らず日い暮る、そなたの所い前方よ、摩耶參りの時よつたを便漸尋あたりしが此やうよおくれてい、忠度様よ逢事い、成ともく、そりや又どふして、コレ忠度様い先程お出なされて奥よござる、ヤアそれいほんか嬉しやく、早ふ逢たいあいしてたも、成程お逢なされませ、じやがコレ旅草臥で休んでござる、けたしましう起さずと、そつとはいつて肌身を付、去つぽりとは寢なれと、睟な詞よおもはゆく、ヲ、乳母とした事が去やらく、と何ぞいの、わけもない事計といひつゝ片頬よ笑の眉、ひらく襖も待兼て、いそくとして入給ふ、折節納戸の暖簾上、欠ましくら立出る蔑次兵衛、ばさま、いかゐ雑作でござつた、是い拠わしと去た事が、不作法な亭主ぶり、イヤ手去やくでたべつおさへつ、銚子切引かけたり

やくついりかしてぐつたりと寢てのけた、内ゑ大分用が有、いかゐ馳走、其内きまゑよと云捨て、とつかゝ急ぎ立歸る、時しも一間、さゝがしく何の樣子か菊の前、襖をあけの裾けはらし、かけ出給へゞ林ゝ驚、コレ〳〵申と引とゞめ、何事が發つたか氣色をかへてとつかゝと、お前ゝどこへでさります、樣子かつゑやれどふじや〳〵、サア其樣子ゝの、忠度樣がどうよくなゝわしゑ暇をやるといの、ゑ、そんならお前のお腹立ゝ尤ゑやが、高いも低も夫が女房ゑ暇をやるゝ、よく〳〵了簡あらぬ筋か、其譯を立なされゑや、コレ科ないお前ゑ疵が付ぞへ、マアとつくりと氣をゑずめ思案してはらふじませ、イヤ思案迄もない、其譯ゝ立て有ど、互ゑ思ひ染しより夫ゑ妻よと云かゝし、一生添ふと思ふた物、縁切れてゝかた時も何となながらへ居られふぞ、恨つらみもありそ海一思ひゑ身をゑづめ、底のもくずとなる覺悟とめずと殺してたもいのふ、死る〳〵と計ゑて、跡ゝ詞も涙なる、

イヤ〳〵何ぼそふおつえやつても、乳母ハンどふも合點がいかぬ、是よハン定て深い樣子が、其子細ハン忠度が、とくと申聞せんと、えづ〳〵と立出給ひ、天の憎所天必誅罰すと、入道の不善一門の積惡よつて、かく迄頽平家の運、此度の戰ひも十が九つ味方の敗軍、某も討死と覺悟極めし事あれど、いつを期してか添果ん、思ひ切て歸られよと、いへ共中〻聞入ず、陣所へ伴ひ行んと有、時よハン忠度女よ迷ひ陣中迄俱したりと、世の人口よかかるといひ、死後迄緣を切ざれど、俊成卿のお身の上、平家よえたえき咎を受、つゐにハン源氏の仇と成て、亡び給ハンん悲しさよ、態難面いひ放し、暇をやりしハン忠度が、師の厚恩を報せん爲、恨と思ひ給ふなよ、といいへもしる運よ叶ひ軍よ勝どながらへて、二度逢んも計がたし、それを賴よ行末の、契りを樂しみ待給へと口よハンいさめ心よハン、是今生の別れぞと思ひ廻せどいぢらしく、さしも武勇よはり詰し弓弦の切し心地よてゐる

もゐられぬ座をそむけ、脇目よ餘るは涙つゝみ兼させ給ふよぞ、夫と悟て菊の前、何ぼ其樣よ、ふたゝび逢ふの添れるのと、潔ぎおつゝやつても、誠しからぬ身の覺悟、討死と云りながら何と見捨ていなれうぞ、いづく迄もお供して生る共死る共、一所でなけりやわゝやいや〳〵、むごいつれないお心と、縋り付て泣給へば、林も心根思ひやり俱よ袂を云ぼりしが、態いさめの聲はげまし、今の程事を分、理かいを解いて云なさるよ、達てお供とおつゝやれば、親は樣へゝ不孝といひ、殿はの爲よゝ猶ならぬ、いかよ姫ぞせなれば迚其辨へがないかいなふ、ゝうとましいお子でゝ有と、詞を盡して俱ゝよいさめす、かせどいやおふの諸も涙中ゝよはなれがたなきふぜいなり、折節風よ誘ゝれて、間近く聞ゆる鯨波、耳を突拔、鉦太皷、乱調よ打立〳〵、どつとかけくる討手の大將、眞先よ大音上平家の落人薩摩守忠度、此家よ忍びおゝする由、注進有て鎧よ聞、召捕ん

爲梶原平次景高が向ふたり、鬱鬼神なれバとて、八方を取かこめバ迚も遁れぬ、尋常ゑ繩かゝられよ、意義ゑ及バゞふん込で搦とる、いかゑ〳〵と呼ゝつたり、人〻扨ゝ茂次兵衛が、注進せしかと驚けバ、忠度ちつ共動じ給ゝず、二人を奥へ忍バせて、太刀おつ取てつゝ立あがり、同おこがゆしや景高、源平互ゑ鎬を削ゞ刃をあらそふ戰場ゑゝ向ゝず、我一人ゑ多勢を以て取かこむ臭怯者、汝ごときゑやみ〳〵と繩かゝる忠度ならず、いでや手並を見せんずと、太刀拔放し身繕ひ、景高いらつてゝふんごめ、下知ゑ從ふ雜兵共、門の戸蹴破り一同ゑ、かけ入〳〵かけ向ふ、多勢を屈せぬ早業ゑ眞向、立わり車切、四方八方はつし〳〵、なぎ立給へバ雜人ばら、皆我一ゑ跡ずさり、同忠度いかりのゝ聲ゑて、うぬらごときゑ刃物ゝいらずと、大手をひろげ待給ふ、手並ゑこりぬ雜兵共、一人かゝりゝ叶ゝ去と、大勢一度ゑどつと寄、引摑でゝ人礫、あやどりなんどを見るごとくめ

さましかりける、次第也勇力無双の働よ。さゑもの景高氣おくれし、遥足出せゝ雑兵共、叶ゝじ物といふ波の、立足もなく、我先よ、むら〳〵ばつと、逃失けり、相手なければ忠度卿、息を休る其中も油断ならざる垣生のやどり、いかゞしてふせがんと、心をくばる時しも有、又もよせくる関貝鉦、鼓責太鼓手よ取如く聞ゆれば、忠度はつと心付き、扨こそ景高、大軍を催し重て向ふと覺たり、戰場ならば敵の勢、何万騎よてかこむ共打破りかけなやませ、譽を顯ゝし見せんず物、軍中よ引かへし願ふ詠歌も腰おれの望も叶ゝず剰さゑも名高き忠度が、斯あばらやよ身を忍び、敵よかこまれやみ〳〵と生捕れんゝ後代迄尸の耻辱名の穢れ、口惜や浅間ゑやと、拳を握り齒嚙を為ゑ怒の涙てる月ゑ、氷をふらすが如くよていたゝしくも、又道理なり、透もあらせず表の方、寄くる軍兵むら立挑燈、天地をてらし亂れ入よと見る所よ、さゝなくして討手の大將、かけゑぼしよ花

田の大紋さはやかゑ、長袴のくゝりをとき、悠〻然と立向ひ、武藏國の住人岡部の六彌太忠澄、忠度卿ゑ見參と、ゑう〳〵と打通傍近く謹で、此度源平兩家の軍い、私ならぬ院宣を蒙り、範頼義經罷向へい、兩陣互ゑはれ勝負、潔き軍いせずして、拔がけせし景高が卑怯の振廻、聞ゑ忍びず此六彌太が參りしい義經の嚴命、其子細い、先達て俊成卿へお願有しは詠歌の内、さゞ波や、ゑがの都いあれゑしを、昔ながらの山櫻かな、右のは歌千載集ゑ入しかど、勅勘有は身なれば、名い憚て、讀人ゑらずと成し趣則ち集ゑ入たる印、此短冊をは覽ゑ入よと、山櫻の流枝ゑ、結び付たる以前の短冊うや〳〵敷指出せば、忠度ゑつと打笑給ひ、我詠歌を我筆の、願ひも仇花ならぬ印は芳志の山櫻、ハア、忝しと押いたゞき、敵味方と隔つれば打捨置るべかりしを、思ひ寄ざる義經の仁心ゑて、歌人の數ゑ加いり、和歌の譽を殘す事、生涯の本望死ても忘れぬ、悦びぞや、迚も遁れぬ身の不運、

死べき時ゝ死ざれば、死ゝ勝る恥有と、名もなき愚人の手ゝかゝり、見ぐるしきさいごもせんかと、後悔せし折ゝ幸武勇の聞へ隠れおほせ、六彌太ゝ生捕れば忠度が恥辱ゝあらじ、サアよつて縄かけられよと、ゞ手を廻し待給へば、心得ぬゞ仰、某君の討手ゝゝ参らず、敵味方の勝負ゝ戰場、其時ゝ両家のはれ業容赦ゝないぞ、互ゝ時の運ゝ任せん、但梶原がごときよいみを見かけ、ぬけがけゝて手がらゝせんと、思ふ樣な六彌太と思召るゝか、ゝゝゝはつとあざ笑へば、忠度卿理ゝふくゝ、實ゝ是ゝ誤つたり、盛なる時ゝ制ゝ、衰ふる時ゝ制せらるゝ理り、いかなれば義經といひ汝迄誠有一言、心魂ゝてつし今さら返す詞もなゝ、惜からぬ命なれ共明なば陣所へ立歸り、はな〳〵敷軍をせん、其時望ゝゞゞ遷が首、忠度卿ゝ我討取、必討れよ、おんでもない事、ソレ〳〵八聲の鷄もなく、明る間近ゝ、とゞせ共、路次の狼藉覺束なし、陣所へゞ供仕らん、ソレ〳〵用意の馬引と、飾立たるくろ

の駒に前よ指よする、辭するよ及ばず忠度卿、立髪掴んでゆらりとめせば、一間の内ゟ菊の前ゝなふ去ば去とかけ出給ふを林ゝ押とめ立身で隱せゝ岡部の六彌太、夫と悟つて忠度の脱かけ給ひし上着の袖、刀を拔てふつゝと切、乳母といふよ惝り、扨、ふしぎな顔せまい物しで老女ゝ媼といひ、又姥共よぶ、今宵忠度卿の、お宿をヤせしにほうびよ是を遣ゝす、それ共、若ゝ敷錦のかた袖、年寄が貰て益なしと思ゝゞ、外よほしかる方も有べし、是も其人の形見と思へ共、猶なつかしき袖のうつり香といふ歌の心、其方が耳よ、ソレきくの前よく心得てお受ヤせと指出せば、ヨヘ冥加なき仕合と、いたゞく右のかた袖ゝ右の腕を落かたの、軍よ討死し給ひし、後の哀と去られたる、思ひの種や涙の種仁義を種の六彌太が、東雲近し急がんと先よすゝんで立か弓、いゝぬゝいふよいやまさる暇乞さへ澄顔よ、見送る姿ふり返る心の種の詠歌も昔おがらの山櫻、散行身

よも指かざす、流の枝の短冊い、世〻よ譽を殘す種、歎の種の離れ際、いさめを種と隔つれどはでし涙の悲さみを俱よなづみて耳をたれいあ〻く、聲も哀そふ駒の足取諸手綱引わかれ行曉の空も、名殘や惜むらん

○第三

世よあらぱ又かへりてん津の國の影の、松と詠置し、一木と俱よ年を經し額め黑痣口くせよ、佛の名を唱ふれぱ白毫の彌陀六と、人よ云られ云、石屋有實交りも信心〻の同氣同行相求、朝暮勤る看經の、責念佛の終よい、諸國諸山よ建置し石塔よ有戒名の數も限りもなむあみだ、願以此功德平等の回向の聲も殊勝なり、日暮紛れよ、門口へ連立てくる石屋共親父殿内よかといふ聲聞てずつと立出、同行衆ようこざつた、けふい大分聞しさよ爲業の形で直よ看經たつた今仕廻たサ、あがらさやれなむあみだ〻〻、イヤこれ彌陀六殿、今夜い珠數くりの數右衛門が逮夜百万

遍ヤよつて誘よ來まえた、ほんよそふえやどりや參りまえよコリヤお岩まだ彦助ハ戻らぬか、コレ娘が起たら藥あたゝめて飲せ、若石塔を誂さえやつたお若衆が見へたら戻る迄待して置ナア〳〵ござれちやつと念佛かき込で夜食をヤそえや有まいか、ナイ〳〵佛も百味のおんえきこちもなら茶のゆ食せう、えよざい佛法腹念佛、門念佛を口ゝよ打連てそ急行、跡へ下人の彦助が拐の先よぶら〳〵と網繩引かけ立歸り、ヤレ〳〵えんどや、お岩殿肩も腕もめり〳〵いふハ、ヲ、道理〳〵嘸草臥、そえて石塔ハ建まえたか、イヤまだ建ハせぬが、お里や内よ用があろと思ふて先へ戻つたが旦那殿ハ奥よか、イヤ〳〵同行中よ百万遍が有て參らえやつたわいの、ホリそんなら幸、此間小雪樣が病氣えや迎引てんでござるハ、彼石塔を誂さえやつたお若衆よ、戀煩ひと見たハ違ハぬ、旦那の耳へ入ぬ內異見せうえや有まいか、イヤそりやわしも如在ハない、此間からいろ〳〵といふても

いかな〳〵、此戀が叶はねば井戸へ身を投るの首をめて死るのとこれい事計いふて居や、そりやいやなこつちやの、そんならかう居や、たつた一度で思ひ切居やれと、とつくりと合點さをていつそ逢そ居や有まいか、もふせう事がおい幸い今夜お若衆が見へる筈居やが、其間よ旦那が、ア、何のいの百万遍ならちやつと居や有まい、娘はよ其譯いふて工面さつをやれ、おりや寐所で彼時分、獨角力を取まをよと云つゝ勝手と奥の間へ別れてこそい入よけれ、既よ其夜も丑滿の風をん〳〵と更渡り、いと物すごき時をもあれ、ねとりの聲の哀げよ、彼の聞ゆればいとゞ猶心はそさといふか居さ、小雪ゝ部屋を立出て、灯火かゝげ覗へば、門の戸はと〳〵打たゝき、頼ませう〳〵といふ聲ゝまがふ方なきお若衆樣、それ嬉居やと飛でおり、戸口を明てようこそお出、さア〳〵こちへと伴ふて、下よ居る間も胸せかれ顔は上氣のはぢ楓指眞てもじ〳〵と、挨拶も

出ぬ其内よ、お岩が聞付走出、是い〳〵お若衆様今日お出の約束故只今迄待ましたが、なぜ更てお出あされた、されば手前い少様子有て人目を忍ぶ者なれい、晝い勿論夜迚も密な時刻を心がけ態只今參えが先達て誂置た石塔が出來まえたら、彼地へ建て貰たさ、先は亭主よ逢まえたいイヤとゝ様い只今留主でござりますが、おまへがお出なされたら待せまして置様よとナラお岩、アイヤ付て出られまえた、歸られます迚名代い此娘は、お咄の相手よしてうつゝ答つやつゝ返しつ、とかくお心安ふして進ぜて下さりませ〳〵奥へとすゝむれば、然らば左様致さんと、何の心もつゐ立て、一間へ通る後かげ、見送るお岩が手を打て、扨も能器量、あの様なお若衆い日本國を尋ても今一人と有るまい、惚さえやんすも道理道理、えたがコレ小雪様うろ付てござる所じやあいちやつといて敎た通り何かなしよあたまから抱付てこけたがえいぞや、夫も上へならぬや

う下から隨分あしらひなされ、アレまだうぢかいもどかしや〳〵早ふとむりやりよ、押やり突やり、跡びつ去やり、ア、世話やのどふやらかうやら首尾なつた、是から休もと儘なれどたつた一重の壁ぢ去よ、隣の餅搗聞やうで寢られそむないよさりじやと、いひつゝ勝手へ入跡へ、小雪ハ立出興さめ顏、めんようなお若衆樣、慥よ奥へいか去やん去たがかいくれ姿が見へぬハどふじや、ふしぎ〳〵とうろ〳〵きよろ〳〵尋る内、てなたの障子さつと明、爰よ居ますハいの、是ハしたり意路の惡いいつの間よ拔なさつた、人の思ふ樣よもない心づよいお方じやと、云つゝ傍へ指寄ベ飛去さつてア、これ〳〵、始終の樣子を見聞よ付、詘しき人の志嬉しいとハ云ながら、我身ハ深き樣子有て假よも妹背のかたらひをなす事叶ハず、緣なき事ハ前生の約束ならめと諦て思ひ切て下されと、いふも道よ氣の毒の、打去はれたる其風情、小雪ハはつと力を落し譬樣子

が有迚も、是程よ思ひ詰心を盡すかいもなく、情ならもふり捨ていやとおつゝやりや生てゝ居ぬ、むごい難面お心と恨歎けば、いやとよ恨ゝ去事ながら、逢ゝ別れの初といふ譬よ洩ぬ我身の上頼置たる石塔が今よも成就ゝてあらば、再び此家へ來らぬ故逢見る事も叶ふまじ、只儘ならぬゝ世のならひはかなき物ゝ人の身の一生ゝ皆夢と思へばさのみ迷ひも有まじ、去ながら今を限りとの別れといへば、誰しも名殘惜い物若も戀しき折からゝ、心のいさめ共あらん、いで〳〵筐よ參らせんと、錦の袋押ひらき青葉よさかへし笛竹を、渡す心も無爲なく戴く身よもさあがらよ道理よ向ふ矢先ゝなく、ひよんな事ゝやといふより外詞も、涙よくれゐたる折から道〻口くせよなむあみだ、なむあみだ六逮夜ゝいきせき戻り門の戸を、明い〳〵と打たゝけば、あいと奥から返事してお岩がかけ出、且那樣のお歸りそふなコレ小雪樣、折角戀よなされたあなたを此

儘で思ひ切おまへの心がいかよしてもいとしぼいせめてもの心ゆかし此間よちやつと抱付なされと、むりよ押やり庭よおり戸口を明、旦那樣早かつた、何の早かろ、百万べん〳〵だら〳〵と跡の噂しで斗方もなう夜が更た、なむあみだ〳〵、お若衆いでゞつたか、其お方い、どふゑや〳〵、さつきよ見へたけれど耻しかつたか門口でうぢかい〳〵はいりよくそふよゑてゞ有たを、もどかしがつて娘ばかつゐはいらしなされたいいな、何ゑや娘がもふはいらしたか、なむあみだ〳〵、旦那樣と云た事が悪い聞やう、此門口よゞざつたを内へはいらしなされたといふこつちやいいな、そふゑつかりといへゞゑいよどふやら紛いしかつたではつと思ふたどりやお目よかゝろかとずつと通つて是い是い、嘸お待遠よゞざりまゑよ、扨お誂の石塔今日の約束なりや夜を日よ次で漸出來し、今朝から若い者等よ運ばせたが、大かた建たでゞざり

まえよ、それゝ嬉しやいかゐ世話でござつた、イヤ世話ゝ家業えやがお氣よ入たらこちも仕合、マアはらふじて下さりませ、成程〳〵同道えて參りたいそんならお供致しまえよと、立て用意を取急げば、コレ〳〵とゝ樣わしも一所よ行たいゝいなそりや何で、ハテ石塔の恰好見よ、ハテ扨わけもない何のわれが見る事で、爰やあそこの所えやなし殊よ夜道えや、あぶないずとせと門えめてよう留主せい、コリヤお岩そちも傍から隨分氣を付誰がこふ共かんまへてついはいらすなよ、合点かサア〳〵お出と打連立急でこそゝ出て行、月もさやけき夜もすがら、四方の景色もすみのぼる、光りを覆ふ雲ならで、雀のやどりかげくらき、松の林よ風あれて、汀の波のおのづから音もはげしく打寄て、高根よひゞく山彦ゝ、とう〳〵さつと布引の瀧の、えら糸たへずと人の、とへばかなたと五百崎よつゞく、數池村里も、急で忉利天上寺、摩耶のお山をめてよ見て、行道筋も直ならぬ脇の

濱邊や磯傳ひ、神戸も跡よ湊川、流るゝ水の淀ならば爰も繼橋かけ渡す冊を守りの神垣や、森も玄げみて置露の、垂水の里も早過て行ば、程なく上野山一の谷よぞ着けるが、玄のゝめ近き横雲のたなびく空も靑ゝと、枝葉玄げりし松かげよつゝくり立たる影石、遠目よそれとみだ六が、走寄て是じや〳〵、先達て遣いされた所書よ合せ、若者等よ云付たりや建いたてたがちつくり笠よふりがあるど、押直してためつすがめつ、恰好見て下さりませ何とよふでざりませうがや、是からくるひのない樣よ瞳を合すい坂合と、懷か蓋物取出し、重の際ゝ塗所へ山畑かせぐ百姓共鋤鍬かたげどや〳〵と通りかゝつて、石屋の親仁殿か、おいやいてりや皆とうから精が出るな、イヤこちとらよりこなたがとうかあぢな所へ石塔を建さ玄やつたの、ハテあの人い業爲じやよつて、どこで有ふが持運んで建ねばならぬが、誂人が怪有なやつじやの、ア、これ〳〵むさ

と麁相云まい、其施主人が爰よりござるぞ、ナアお若衆様、我も人も亡者の爲卒都婆一枚立ても三悪道を遁るゝといふ、まして大そふな此石塔をお建なさるいは奇特なお若衆様、結構なお志でございます、イヤこれ親仁殿、お若衆の施主人のと人もないよそゝや何いいなやる、何といわいら目がさめぬな、アレまたどこよ人がゐるぞいの、ハテこれ爰よハテはんよ見へぬ、ヤレめんようなたつた今迄爰よで有たが、ハテどつちへでござつたあ、お若衆様〳〵とよべば俱〳〵百姓共、爰かそこかと尋る所へ、娘の小雪がかちはだし息もすた〳〵走付、お若衆様よたつた一言いひたひ事が有てきたぞよつと逢して下さんせ、イヤ逢して所ゑやない影も形も見へぬい、親仁殿、お若衆がゐやらねば忽こなたの損ゑやぞや、所を知てか、但先銀でも取て置ゑやつたか、いやてや、仁体が能から所も問ず一銭も受取なんた、夫でよめた、石塔をかゝ付よ何ぞせしめる下工、扨い街よ、極つ

た、遠くいうせまいぼつかけん、皆こい〳〵と立さいげば、イヤこれ〳〵待ちやんせ、よもやそんあさもしい心なお方でい有まい、其證據いわしよやるとて、コレ此笛を貰ふたのが、ハアどれ〳〵ことやまあ袋が結構な赤金襴ぢや、扨笛い生竹でもないが節からちつくり枝葉が有、いか樣是を鑑よせふなら百が物い有ふかいナラ親仁殿ハテ扨何の錢よあらふ夫も娘が一ばいくたのぢや、ヱ、こんな事ならあたまで半銀取て置たら、まんざらの損もせまいよあたむごたらしいめよあふたと、悔まかいもあら笑止や、みだ六がぬかれたと傳へて諸事の誂物、手附を取といふ事い此時よりと云られたり、時ぢも跡の松原ゟ足早よくる女い何者成といふ中よ走り近付藤の局、コレ〳〵ちよつと物といふ、船寺いとつちぢやの、敬てたもと有ければ、ハテ、夫い是からよつ程遠いが、見れば賤しうない女中の、たつた一人かちはだしで何故寺を尋さつぢやる、さればわらい〻樣子

有て跡を追手のかゝる者、ゑぞらくかげを隱さん爲と宣ふ中ゑ目早くも娘が持たる袋を見付、なふそれちよつと見せてたべと、手ゑ取給へば紛ひなき青葉の一管、ヤア是い我子の敦盛が肌身はなさぬ秘藏の笛、どふしてこなたの手ゑ有と、聞て親子も不審顏、百姓共口〻ゑ、其敦盛といふ人い、此間の戰ひゑ、源氏の侍熊谷の次郎が手ゑかゝり死しやつたゑやないかいヤ與次郎、ヤ、其時ゑいぢらしい玉織とやらいふ内裏上臈も殺されて居たげな。と聞てゐ臺い、ヤア〳〵何敦盛い討れしとや、福原の館ゑて母樣ゐ無事でおさらべと玉織諸共いさぎよう、いふたが此世の暇乞、長い別れゑ成たかと、有し事共くどき立、人目も恥ぬさけび泣前後、ふかくゑ見へゑける。ヤこれ親仁殿、合點のいかぬ事が有、死しやつた敦盛樣があの笛の主なれば、こなたゑ石塔誂たお若衆とひとつゑやないか、いかゑも、ヤ其死だ人が來そふな物ゑやないぞや、いかゑも、ハヽア聞へた、さつ

きよ爰迄連立てきて、あの物のいふ中かきけす樣よ見へなんだい、扨ハ幽靈で有たよなと、いへバ皆ゝ興さめ顏、ハ臺い猶も悲しさの思ひいやますハ歎、小雪も始終を聞よ付、はかない事やと計よて、俱よ袂をぢぼりける、折ふし遙の松かげゑむち〳〵鳥の搏がごとくかけくる大勢みだ六が、あれこそ慥よ追手の者、先ゝあなたを隱すよ幸、此石塔の後へとハ臺の手を取忍バせて、何と思やるいづれも、追手のやつらが、此所をすなをよ通れバあなたの仕合若も何かとゐぢばらバ、是迄平家の領地よ住だハ恩の爲、一働せう爰やないか、ヲヽすてん手よ鋤鍬の、むね打くらハせばひまくろと、いふ間もあらせず砂煙蹴立踏立かけくるい、梶原が郎等番場の忠太須股運平先として、數多引連つゝと寄り、コリヤ〳〵百姓共、三十餘の女一人此所へきたで有ふ、どつちへ逃たそれぬかせ、ハイ成程〳〵、其女ハ、あの道を横切よ、濱邊傳ひよ走つたが、そふ二三里も行ませう追

手の乘なら一足も早うこざれとせかすれば、扨てそ遣すな皆こいと、かけ出すふりにて立留り、運平が耳ゑ口、ゑめし合せてこかげゑ殘し濱邊をさしてかけ足行、跡打ながめ樂ゑや、此間ゑ早ふとば臺を出し、こりゃ娘、あなた一人い覺束ない、寺迄送つて内へいね、ちやつと〳〵といふ所へ、思ひがけなき木影ゟ須殷運平飛で出、ヤどこへ〳〵かう有ふと推量し、忠太が我を殘し置れた、ヤ、早ふば臺を渡せ、邪魔ひろぐとかたつぱし、そつ首ころり打落す何と〳〵と罵れば、百姓共せしら笑ひ、こりゃやい、そつ首のそつくいのと、わいらがうでの動く間ゑうつかりとして居ゑふかい、ヤア相手仕事ゑや手早ゑこいと、てんでゑ鋤鍬大熊手、打てかゝれば運平始め數多の家來も一同ゑ拔連〳〵渡り合、打あふ隙ゑみだ六がンレば臺樣逃た〳〵、娘も逃よとあせる中、元來達者の百姓共、腕先揃へてかゝはば打、かたはし家來を打なぐり、運平を追取まき、投たりふんだりけと

ぼしたり寄てかゝつて打たゝく、急所よや當りけんうんとのつけよ反返れぺ、ゴリヤ死だいと逃行家來、又追かくるをみだ六が、コレ〳〵待たと呼かへし、ぼ臺の難義を救ふ爲、ぼつちらす計でよいよ、死だりや尻がむづかしい、ゴリヤまあどふした物であろ、どふといふたら逃たがよいサア皆ござれといふ所へ、かけつてくる庄屋の孫作死骸見付て扨てそ〳〵、一人もちらす事ならぬぞや、コレ皆よう聞きやれ、今梶原樣の郎等番場の忠太といふお侍がござつて、百姓共が狼藉し家來運平を殺したる由よつくいやつ、殘らず引立來るべしと嚴しい云付、ヤ、ひよんな事云ておらよ迄役害をかける遲ないつたら猶こいい、サア〳〵お云やといふよ皆〻尻込の、中よみだ六すゝみ寄殺したと聞云やつたい大きな間ちがひ、ありや目がまふて死だの云や、其證據よいソレ死骸よ一つも疵がない、ムウ夫が定ならおらも嬉しいドレ〳〵とからだを改め、ほんよどこよも疵いない、ごりやあつ

ちのが大きな麤相、ハテそち達が殺さぬからん何のこんい事んない、此中でよう物いふ者たつた一人いて、さつぱりと云譯すりや濟事ぞや、ほんまそうじやハテ誰がよかろなアいやこれ年の功じやみだ六いかゑやれイヤいく分んかまんぬがおまやロくせの念佛が邪魔よ成てどふもならぬ、そんなら此庄屋が指圖せう、日比ちよびくさようゑやべる雀の忠吉やらぶかい、イヤわゑやあんまり口早で何のこつちや譯が知まい、扨んびゑやの五太右衛門かい、おりや聲が鼻へ入ぞ、といふて丹兵衛ん咽がごろつく、與次郎ん齒ぬけ也、指詰又平おいきやれ、イヽいやヽ、こちやどもりますんいの、ハテ扨其樣よ讓合てん埒が明ぬ、幸爰よ石を運だ繩が有是で闔取したらよかろ、ヤ、そまやいやおふいんさぬやう此庄屋かゑてくると、手早よ繩切後でもちやくちやひん握り、調ヨリヤ結んだのを取た者がいくのじやぞ、ハテとれいもよ、ヲット市かゝとれとりやる西國廻つて是ゝとてん

でも綱先引ばれば、あた次數よんでしたが一筋餘つたい、そりや親の綱じや庄屋殿とら云やれ、はんもそふじやおれがとろ、サアひけ〳〵かたはしからいなしてくりよ、ヤすつとせい〳〵、ハテ悲しや結んだのいおれじや有た、サア庄屋殿いかしやれ〳〵、イヤ待よ、おりやいかん筈がない、此場の樣子を知てゐるわいらが云譯する筈じや、デモ闇が當つた物、そんなら最一度、イヤ仕直しいおらぬ〳〵むりいいすといかん云やれと、寄てかかつて引立押立、ヨイハサツサ是いめいわく、ヨイヤサツサ待てくれんか、ヨイヤサツサ了簡ならぬか、ヨイヤサツサあんまりどうよく、ヨイヤサツサおつ立ひつ立、ヨイヤサツサて、ヨイヤサツサて、ヨイヤサツサそ、「行空もいつかいさへん須磨の月、平家い八島の涙よたゞよひ、源氏い、花の盛を見る中よ勝れて熊谷が、陣所い須磨よ一搆、要害嚴しき、逆茂木の中よ若木の花盛、八重九重も及びなき、それかあらぬか人ごとよ、熊谷櫻といふぞかし、花おらせじとの制札を讀で行人讀ぬ人、一つ所よ立集り、仰

も咲たり〳〵、花より見事な此制札、辨慶殿の筆ぢやげな、扨も見事一つも讀ぬ、ナ、あれハの、義經樣が此花を惜一枝きらバ指一本切べしとの法度書、ヤア花のかハりよ指きろとハ首切下地ナ、こハや見てゐる中も虎の尾を踏心地する皆ござれと、花よ嵐の憶病風ちり〳〵よこそ別れ行はる〳〵と、尋て爰へ熊谷が妻の相撲ハ子を思ひ夫思ひの旅姿、陣屋の軒を爰やかしこと尋しが、幕よ覺の家の紋、嬉しや爰と内よ入、折節家の子堤の軍次立出て、是ハ〳〵奥樣か、ナ、軍次そなたも息災さふな、マアめでたい〳〵、熊谷殿や小次郎もかハる事ハないかの、早ふ逢たい逢せてたも、旦那ハ今日ハ廟參、小次郎樣ハ先頃ハ前勤でハ下りなし、マア〳〵長の旅路お勞をお休めと、挨拶とり〳〵なる所へ、敦盛卿のハ母藤の局虎口の難を遁れきて、こけつ轉びつ花のかげ、陣屋をめがけ走付、跡ハ追手のかゝる者かげを隱して給ハれと、けハしき体よ驚て相撲ハ傍へ走寄、

見るよ見かゝす互の顔、ヤアお前ゝ藤のお局様でゝないか、そふいやるそなたゝ相摸じやないか、デモ久しやなつかしや、お床し様やと手を取てアそなたへと伴ひ入、去たしき体よ心をきかし軍次ゝ勝手へ入よけり、相摸ゝやがて手をつかへ、誠よ一昔ゝ夢とヤが、大内よ御座遊ゝす時、勤番の武士佐竹次郎殿と馴初、ば所を拔出東へ下り、お前様のお身の上を承れば、ば懷胎のお身ながら平家のば家門参議經盛様方へ縁づき給ふとの噂、其折ゝ世盛の平家、ば威勢ゝます〳〵とかげながら悦びましたよ、此度源平のたゝかひ、ば一門もちり〳〵と聞よ付、ア、此藤の方様ゝ何となされたどふ遊ばしたと、一人苦よしておりましたよ、アば機嫌おお顔を見て、おめでたやお嬉しや、そなたも、無事でアア嬉しい懷胎で出やつた時の子ゝ姫ごせか男か、息災で育て居るかと、ちよつと寄ても女同士問つとゝれつ年月よ、つもる言の葉くりかへし嬉し涙の種ぞかし、藤

の方涙ぐみ世の盛衰いせひるなや、其時ゑ産落したい、無官の太夫敦盛逆器量發明揃ふた子を今度の軍ゑ討死させ夫い八島の波ゑ漂ひ、我のみ殘るうきなんぎ淺ましの身の上とかこち給へば、お道理〳〵、以前のぢ恩も有、連合ゑも語りお身の片付後世の營お心任せゑ致しませう、以前い佐竹次郎と申て、北面同然の武士只今ゑてい、武藏國の住人志の黨の簇頭、熊谷次郎直實と人も云つた侍と、聞よりぢ臺い、ヤアそなたの連合の佐竹次郎、今でい熊谷次郎といふか、アイすりやあの熊谷次郎いそなたの夫よな、ヤアはつと吐胸の氣を云つめ、何と相摸、以前大内ゑて不義顯れ、佐竹次郎と諸共ゑ、禁獄させよとの院宣、自が申宥めぢ所のぢ門を、夜の内ゑ落してやつたを覺へてか、アヤア其時のぢ恩、何の忘れませうぞいな、ヤ、其恩を忘れずば、助太刀してそちが夫熊谷を自ゑ討してたも、エヽイそりや又何のお恨で、サア最前も、咄した院のぢ所のお胤、無官の太夫敦盛をそ

ちが夫熊谷が討たれいの、ヱ、そりやまや誠でござりまするか、スリヤそあたれ何よも去らぬか、ヤはる〳〵と東方今來て今の物語、聞てとむねの誠しからず追付夫が歸り次第樣子を尋ね其間暫くお扣へ下されと、詞を盡し理を盡し、なだむる折よ表方、梶原平次景高所用有て推參と呼れる聲、ヤア何梶原とや、見付られてれお身の大事、先〳〵こちへとは臺の手を取一間へ伴ふ其中よ、堤の軍次立出、今日れ主人直實志有て廟參には用あらぬ來よ仰置れ下されと、地よ鼻付れぬ平次景高、何熊谷殿れ他行となソレ家來共、其石屋の親仁め引立來れ、はつと答て科もなき白毫のみだ六を、平次が前よ引居れぬ、なまくら親仁め儕何者よ頼れ、敦盛が石塔い建たやい、平家れ殘らず西海へぽつくだし、誂ゆべき相手なけれぬ、察する所源氏方の二股武士が、頼みしよ違ひれ有まい、ヤア眞直よ白狀ひろげ、僞ると鉛の熱湯背骨をわつて流し込と、おどしかけても正相一遍、拠、もは

無理なる詮議、先程もヤた通、石塔の誂人ハ敦盛の幽靈、五ヱんの事ハ扨置一ヱんも手附ハとらず、建るヒ其儘石塔の喰逃せめて人魂でも手附ヨ取たら、小挑燈の代りヨ致ましせうヨ冥途へ書出しハやられず、本の是がそん玄やうぼだい、有やうのヤ上願以此功德施一切此通りでござりまするヒ取玄めなき、ア何おつ玄やつても糠ヨ釘ヒ、軍次が詞ヨ平次ハ悪智惠、大かた石塔を建させたわろも合點〳〵、熊谷戻らバ三つ鐵輪の詮議先そやつめを引立來れヒ、一間へ入ば家來共、石屋の親仁をむりやりヨ引立奥へ連て行、相摸ハ障子、押ひらき、日も早西ヨ傾しヨ夫の歸りの遲さよヒ、待間程なく、熊谷次郎直實、花の盛の敦盛を計て無常を悟りしか、遠ヨ猛き武士も、物の哀を今ぞ玄る、思ひを胸ヨ立歸り、妻の相摸を尻目ヨかけて座ヨ直れバ、軍次ハやがて覆ヨなり、先達て平次景高殿、何か詮議の筋有ヒてハ影の石屋を引連ハ出有、奥の一間ヨハ待ヒ、委細

を述れば詮議とゝ何事ならん、ハいや其方ゝ一献を催し、梶原殿を饗アせ、サア早くいけ〳〵、ハテ扨何を猶豫すると、阿ちらされ是非なくも相摸ゑ顔を見合して心を殘し入ゑけり、跡見送りて、熊谷ゝ、同コリヤ女房、其方ゝ爰へ何しゑ來た、國元出立の節陣中へゝ便も無用と、堅云付置たるゑ、詞を背といひ剩女の身で陣中へ來る事、不届至極の女めと、不興の体ゑ相摸ゝもぢ〳〵、其ふ呵を存ながら、どふかかふかと案じるゝ小次郎が初陣、一里いたら樣子がえれうか、五里來たら便があろかと、七里歩十里歩、百里餘りの道をつゞ、都迄ホ、ヲえんき、登つて聞ば一の谷とやらで、今合戰の最中と、取〻の噂ゆへ子ゑ引されるゝ親の因果、ぢ了簡下さりませ、同ア此小次郎ゝ息災で居ますかと、とへば熊谷詞をあらゝげ、戰場へ赴からゝ命ゝなき物、堅固を尋る未練な性根、若討死えたら何とする、いゝえいな、小次郎が初陣ゑ、よき大將と引組で討死でも致したら、嬉しい事でご

さんえよと夫の心ゑ隨ひし、健氣な詞ゑ顔色直し、先小次郎が手柄といふゝ、平山の武者所と爭ひ拔がけの高名、軍門ゑかけ入ての働手疵少少負たれ共、末代迄家の譽、ゑて其手疵ゝ、急所でゝござりませぬか、シレまた手疵を悔む顔付、若急所なら悲しいか イヱ 何のいな、かすり疵でも負程の働ゝ、出かしたと思ふて嬉しさの餘りゑ尋其時ゑ前も小次郎と一所ゑゑ出なされたか、危しと見るより軍門ゑかけ入、小次郎をむりゑ引立小脇ゑひんだき、我陣屋へ連歸り、某ゝ、其軍ゑ擧手の大將、無官の太夫敦盛の首取たりと、咄しゑ扨ゝと驚相摸、後ゑ聞ゐるは臺所我子の敵と有あふ刀、熊谷やらぬと拔所鐺摑んで、ヤア敵呼ゝり何やつと引寄るを女房取付、ア、これ〳〵 聊爾なされな、あなたゝ藤のは局樣と聞て直實惚りし、ハア 思ひがけなきは對面と飛退敬ひ奉れゞ、熊谷軍のならひとゝ云ながら、ゑはも行ぬ若武者を、ようむごたらしう首討たなア、ヤア 約束ゑや

相撲助太刀去て夫を討せ何と〳〵と刀追取せり付給へ〳〵、ヤイあい〳〵と返事も胸よせまりながら、エ、これ直實殿、敦盛樣ハ院のお胤と去りながら、どふ心得て討去やんした、樣子が有ふ其譯をと、いふもせつなきをろ〳〵涙、ア、おろか〳〵、此度の戰ひ敵と目さすハ安德天皇、夫よ隨ふ平家の一門、敦盛ハ扨置、誰彼と鎬を削よ用捨がならふか、イヤ藤のハ方戰場の義ハ是非おしとハ諦下さるべし、其日の軍の有增と敦盛卿を討たる次第、物語らんと座を搆扨も去六日の夜早東雲と明る頃一二を爭ひ拔がけの平山熊谷討取と、切て出たる平家の軍勢、中よ一際勝れし緋威さしもの平山おしらひ兼濱邊をさして逃出す、ハテ健氣おる若武者や、逃る敵よ目なかけそ熊谷是よ扣へたり、返せ、戻せ、ヤ、ヤ、ヤ、おいと、扇を持て打招け〳〵、駒の頭を立直し、波の打物二打三打、いでや組んと馬上おがらむんづと組兩馬が間よどふと落、ア〳〵何と其若武者を組敷てか、されハハ頭を

よく見奉れば、かね黒ぐろと細眉よ年はいざよふ我子の年ばい、定て二親ましまさん其歎いか計り、子を持たる身の思ひの餘り、上帶取て引立塵打はらひ早落給へ、とすゝめさゑやんしたか、そんから討奉るお心でいなかつたの、ヲ、早落給へとすゝむれど、イヤ一旦敵よ組ゑかれ何面目よ命がらへん、早首取れよ熊谷、ナニ首取れといふたかいの、健氣な事をいふたなふ、サア其仰よいとゞ猶涙ん胸よせき上し、まつ此通よ我子の小次郎敵よ組れて命や捨ん、わさましきい武士のならひと太刀も拔け兼しよ逃去たる平山が後の山ん聲高く、熊谷こそ敦盛を組敷おがら助るい二心よ極りしと呼いる聲ゑ、エ、是非もなや、仰置るゝ事あらば、云傳へ參らせんとやし上れば、ほ涙をうかめ給ひ、父い波濤へ赴給ひ、心よかゝるい母人のほ事、きのふよかはる雲井の定なき世の中をいかゞ過行給ふらんみらいの迷ひ是一つ、熊谷賴のほ一言是非は及ばずほ首をと、咽ず

中より藤の局、左程母をゞ思ふなら經盛殿の詞よ付、なぜ都へい身を隱さず、二の谷へい向ひしぞ、健氣よよらふた其時い母も俱ゝ悦んで、すめてやりしかいいやな、覺悟の上も今さらよ胸もせまりて悲しやとくどき、歎かせ給ふよぞ、ゞ尤とい思へ共相摸い態聲はげまし、イヤ申しお局樣、ゞ一門殘らず八島の浦へ落行給ふ中よ一人踏とゞまり、討死なされた敦盛樣數万騎よ勝れた高名、但逃のび身を隱し、人の笑ひを受給ふが、おまへの氣でい嬉しいか、ゞ未練なゞ臆怯なといさめよ熊谷、でかした〳〵、コリヤ女房、ゞ臺所此所よゞ座有ていお爲よならぬ、片時も早く何方へもゞ供せよ、サア〳〵早くいけ〳〵、我も敦盛のゞ首實檢よ備へん、軍次いおらぬか早參れと、呼いる聲と諸共よ一間へ「てそい入相の鐘い無常の、時を打、陣屋〳〵の灯火よいとゞ悲しさ藤の方、ァ、思ひ出せゞふびんやな、今いの際迄も肌身はなさず持たるい コレ此青葉の笛、我と我身の石

塔を建て貰ふた價よと、渡し置た此笛の我手よ入しも親子の縁、魂魄此世よ有あらぺなせ母よいまよ見へぬぞ、聞へぬ我子やなつかしの此笛やと、肌よ付身よ添て盡せぬ、思ひやるせなき、コレヤ其笛がよいに筐經だらよより笛の音を手向るが直よ遐善、敦盛樣のお聲をぺ聞と思ふて遊ぺせと、すゝめよ隨ひ藤の方涙よ、去めす、歌口も、ふるふて、音をぞ、すましける、親子の縁の、纜よや、障子ようつるかげらふの姿ハ慥敦盛卿藤の局ハ一目見るより、ヤレなつかしの我子やと、かけ寄給ふを相摸ハ抱とめ、香の煙よ姿を顯ハし實方ハ死て再び都へ歸りしも、一念のなす所、有まい事よハあらぬ共、いぶかしき障子のかげ、殊よ親子ハ一世と下せぺ、に對面遊ぺさぺに姿ハ消失ん、イヤなふ四十九日が其間魂宙宇よ迷ふと聞、せめてハ逢て一言をとふりはあし〳〵障子くハらりと明給へぺ姿ハ見へず緋威の鎧計ぞ殘りける、はつと計に藤の方、相摸も俱よ取付て扨ハ鎧

のかげなるか、懸しと迷ふ心からお姿と見へけるかと俱よこがれて正体も泣くどくこそ哀なれ、時刻移ると次郎直實首桶携へ立出れば、相摸の夫の袂を扣へ、コレヤ是が親子は一生のお別れ、せめては首よなり共は暇乞と願ふよぞ、藤の局も涙ながらイヤ熊谷、そちも子の有身でないか、野山の猛獸さへ子を悲しまぬのなき物を、親の思ひを辨へて情よ一目見せてたもと、縋り歎かせ給へ共、イヤ實檢よ備へぬ中内見の叶ぬぬと、はね退突退行所よ、ヤア熊谷暫し〳〵敦盛の首持參よ及ばず、義經是よて見やらずるのと一間をさつと押ひらき立出給ふは大將、〳〵はつと次郎直實、思ひ寄ねば女房も、藤の局も諸共よ靭ながらよ平伏す、義經席よ着給ひ、ヤア直實、首實檢延引といひ、軍中よて暇を願ふ汝が心底いぶかしく密よ來りて最前方、始終の樣子の奥よて聞急ぎ敦盛の首實檢せんと、仰を聞より熊谷のはつと答走出、若木の櫻よ立置し制札引拔恐げなく義經

めは前よ指置、近曾堀川のは所よて、六彌太よゝ忠度の陣所へ向へと花よ短尺、此熊谷よゝ敦盛の首取よとて、辨慶執筆の此制札、則札の面のごとくは詞よ任せ、敦盛の首討取たり、は實撿下さるべしと蓋を取ゞ、ヤア其首ゝとかけ寄女房引寄て息の根とめ、は臺ゝ我子と心も空立より給へゞ首を覆ひ、コレヤ、實撿よ備へし後ゝ、お目よかける此首、おさゝぎ有なと熊谷がいさめよ遠はしたなう、寄も寄れず、悲しさのちゞよ碎くる物思ひ、次郎直實謹で、敦盛卿ゝ院のは胤、此花江南の所無は、則南面の嫩、一子をきらば一子を切べし、花よ準し制札の面、察しヤて討たる此首、は賢慮よ叶ひしか但、直實過りしかは批判いかよと言上す、義經欣然と實撿ましまし、、花を惜む義經が心を察し、ァよくも討たりな、敦盛よ紛れなき其首、ソレ由緣の人も有べし、見せて名殘を惜ませよと、仰を聞よりヨリヤ女房、敦盛のは首、藤の方へお目よかけよ、ァィあいと計女房ゝ、あへなき首を手

よ取上見るも涙よふさがりて、かゝる我子の死顔よ、胸ゝせき上身もふるゝれ、持たる首のゆるぐのを、うなづくやうよ思ゝれて、門出の時よふり返りよつと笑ふた面ざしが、有と思へゞ可愛さふびんさ、聲さへ咽よ、つまらせて、ヤ藤の方樣ゝは歎有た敦盛樣の此首、ヒヤア是ゝ、サイナア、これようゝらん遊してお恨はらしよい首ぞやと、譽ておやりなされて下さりませ、ヤ此首ゝお、私がお舘で、熊谷殿と忍び逢懷胎ながら東へ下り、產落したゝゝこれゝ、此敦盛樣其節おまへもゝは懷胎、誕生有し其お子が無官の太夫樣、両方おがらおなかよ持國を隔て十六年音信不通の主從がお役よ立たも因緣かや、せめて最期ゝ潔う死なされたかと悔げよ、とへど夫ゝ診も、せん方涙ゝは前を恐れ、餘所よいひなす詞さへ、泣音血を吐思ひなり、藤の局ゝは聲曇り、ヤ相摸今の今迄我子ぞと、思ひの外な熊谷の情、そなたゝ嘸や悲しかろ、かうした事とゝ露ぞらず、敵を取ふの切ふのとい

ふた詞が恥しい、我子の爲ゑん命の親、忝いと手を合せ、此首の生世の中、逢見ぬ事の悔しやと俱ゑ歎かせ給ひしが、是ゑ付いぶかしきん此濱の石塔、敦盛の幽靈が建させたとの噂といひ秘藏せし青葉の笛石屋の娘が貰ひし、迎我手ゑ入、最前其笛吹た時あの障子ゑ移りしかげん慥ゑ我子と思ひしが、詞もかんさず、消失しん、アヽいや其笛の音を聞てかけ出し、敦盛の幽靈、人目有と引とゞめ、障子ごしの面かげん義經が志と、聞てぼん臺ん我子の無事、悟りながらも箒木の有とん見へて隔られ又も涙ゑくれ給ふ、折節風ゑ誘んれて耳を突ぬく螺貝の音かまびすく聞ゆれば、義經ゐいさみ立ヤア〳〵熊谷、着到知せの螺の音出陣の用意〳〵と、仰ゑ直實畏り急ぎ一間ゑ入ゑけり、最前ゑ樣子を聞居る梶原平次一間の内ゑ踊り出、斯あらんと思ひし故、石屋めを詮議ゑ事よせ窺ふ所義經、熊谷心を合せ敦盛を助し段〻鎌倉へ注進と云捨かけ出す後ゑ、はつしと打たる

手裏劍い、骨を貫く鋼鐵の石鑿うんと計ょ息絶る、スハ何者といふ中ょ、立出る石屋の親仁、ハテ前方の邪魔ょ成、こつぱを捨て上ました、扨幽靈の講釋承いつて先安堵、もふお暇と立行をヤア待親仁、コリヤ彌平兵衛宗清待てと義經の詞ょ恟り、はつと思へどそらさぬ顏、ハレやれ〳〵とつけもない、ほみ影の里ょ隱れのない、白毫のみだ六といふ男でゐす、ハ、ヽ、誠や諺ょも、至て憎いと悲しいと嬉しいとの此三つい、人間一生忘れずといふ、其昔母常盤の懷ょ抱かれ、伏見の里ょて雪ょ凍しを汝が情を以て親子四人が助りし嬉しさ、其時い我三才なれ共面影い目先ょ殘り、見覺有眉間のほくろ隱してもかくされまじ、重盛卒去の後い行衛知ずと聞しが、ハテ堅固で居たな滿足やと、聞よりみだ六づか〳〵と立寄、義經の顏穴の明凄と打ながめ、醜しい眼力ゑやよあ老子い生れながらょさとく莊子い三つょして人相を去ると聞しが、かく彌平兵衛宗清と見られた上い、

ま、義經殿其時こなたを見遣さずゞ、今平家の楯籠る鉄拐が峰鵯越を責落す大將ゝ有まい物、又池殿と云合せ頼朝を助ずゝ平家ゝ今よ榮ん物ま、宗清が一生の不覺、是よ付ても小松殿は臨終の折から平家の運命末危し、汝武門を遁れ身を隱し、一門の跡吊へと、唐土育王山へ祠堂金と偽り、三千兩の黄金と、忘筐の姫君一人預り、は影の里へ身退き、平家の一門先立給ふは旁の石碑、播州一國那智高野近國他國よ建置し施主の知ぬ石塔ゝ、皆是彌平兵衛宗清が、涙の種とは存ぜらずや、今度敦盛の石塔誂よ見へし時も、御幼少よては別ヤせし故、は顔ゝ見覺ぬ共、心得ぬ風俗ゝ世を忍ぶ平家のは公達ならんと思ふより、心能く受合しが、扨ゝ命よかゝりし小次郎がぼだいの爲此濱の石塔ゝ敦盛の志よて有けるか（ツヱいかよ天命歸すれゞ迚、我助し頼朝義經此兩人の軍配よて、平家の一門御公達一時よ亡ぶるとゝ、こゝ是非もなき運命やな、平家の爲よ獅子身中

の虫とい我事、嘸は一門倍臣の魂魄、我を恨ん淺ましやと、或い悔、或い怒り涙い、瀧をあらそへり、元來さとき大將義經、ヤア〳〵熊谷、障子の内の鎧櫃、コレてあたへはつと答へて次郎直實出陣の出立と好む所の大あらめ鍬形の兜を着し、拘出たる鎧櫃は目通りよ直し置、コリヤ〳〵親仁其方が太切よ育る娘へ、此鎧櫃届てくれよ彌陀六、ヤアみだ六とい、フヲ宗清あれば平家の餘類、源氏の大將が頼べき筋い、ム、面白い、みだ六め頼まれて進せまえよ、えたが娘へい不相應な下され物、ヤア内い何でござりまず、改て見ませうと、蓋押明れば敦盛卿、ノヤなつかしやと藤の方、かけ寄給へば蓋びつしやり、コリヤ此内よい何よもない、ヲ、何もおい〳〵〳〵、ホ、是でちつと虫が納まつた、ナフ直實、貴殿へのは禮い〳〵此制札、一枝をきらば一子を切て、ツエ添いといふよ相撲い夫よ向ひ、我子の死だゑ忠義と聞ばもふあきらめて居ながらも、源平と別れし中、どふしてまあ敦盛樣と小次郎を取かへ

やうが、最前も咄した通手負と、僞り、無理よ小脇よひつぱさみ連歸つたが敦盛卿、又平山を追かけ出たを呼かへして、首討たのが小次郎さ、知た事をと尖なる、咄よ相摸いむせび入、ヒ、どうよくな熊谷殿こなた一人の子かいなふ、逢ふ〳〵と樂しんで百里二百里きた物を、とつくりと、譯もいいず、首討たのが小次郎さ、云れた事をともぎどふよ、云かる計が手がらでも、ござんすまいと聲を上泣くどくてそ道理なれ心を汲では大將いさみを付んとヤア〳〵熊谷、西國出陣時移る用意いかよと仰よ直實、恐ながら先達て願ひ上し暇の一件、かくの通と兜を取ゞ、切拂ふたる有髮の相い、義經も感心有ぎ、さも有なん、それ武士の高名譽を望も、子孫よ傳へん家の面目、其傳ふべき子を先立、軍よ立ん望い、尤、熊谷、願ひよ任せ暇を得さするぞよ、汝堅固よ出家をとげ、父義朝、や母常盤の回向も頼むと云たしきは誠、ヘア有がたしと立上り、上帶を引ほどき鎧をぬげゞ袈

裝白無垢相摸は是ゝと取付を、何驚く女房、大將のは情よて、軍半よ願ひの通り、は暇を給ゝりし我本懷熊谷が向ふゝ西方彌陀の國、駿小次郎が拔がけゑたる、九品蓮臺一つ蓮の緣を結び、今より我名も蓮生と改めん、一念彌陀佛即滅無量罪、十六年も一むかし、夢で有たなあとぼろりとこぼす涙の露、柊よ置初雪の日かげよとける風情なりき、そふゑやく、我子の罪障消滅の加勢ゝ是と切たる黑髮詞ゝなくては大將、藤の局も諸共よは涙よぞくれ給ふ、長居ゝ無益と彌陀六ゝ鎧櫃よれんゑやくをかけて思案のゑめくゝり、ゴレ〳〵義經殿、若又敦盛生返り、平家の殘黨駈あつめ、恩を仇よて返さゞいかよ、ヲ、夫こそは義經や、兄賴朝が助りて、怨を報ひし其ごとく天運次第恨を請んげよ其時は此熊谷、浮世を捨て不隨者と、源平兩家よ由緣ゝなし、互よあらそふ、修羅道の、苦患を助る回向の役、此彌陀六ゝ折を得て、又宗清と心の還俗、我ゝ心も墨染よ、黑谷の法

然を師と頼み教へを請んいざさらば、君よも益〻に安泰、お暇ゆすと夫婦づれ、石屋ゝ藤のお局を伴ひ出る陣屋の軒、に縁が有ばと女同士、命があらばと、男同士、堅固で暮せのに上意よ有がた涙名殘の涙、又思ひ出す小次郎が、首を手づからに大將、此須磨寺よ取納め末世末代敦盛と、其名ゝ朽ぬこがねざね、武藏坊が制札も花を惜めど花よりも、惜む子を捨武士を捨、すみ所さへ定めなき有爲轉變の世の中やと、互よ見合す顔と顔、さらば〳〵、おさらばの聲も涙よかきくもりわかれて、てそゝ出て行

○第四　道行花の追風

磯千鳥、いく夜寢ざめの物あんじ、二世とかねたる、たゞのりゝ、はかなくうたれ給ふ共、又鎌倉へとらゝれ共噂とり〳〵　菊の前、心細布胸あはず、けふ立そむる旅衣きつく、なじみをかさねつる、やしなひ君とかしづきの、老女ひとりをつえはしら、名ゝ有ながら呼なれし、うばらの、里を出て

して、あづまの空へと、思ひ立、心の「内こそ、はるかなれ足よいづれの、玉ほこよ末ゑ、ち涙の、むこ川や、琵湯のゝ池よすむ月も心い、くもる片袖の、其移り香も筐かと、思ひぞつもる芥川、いつかふしみも、跡よなし殿ほよやがて近江路と、見へ渡り、たる風景も心せかれて行道いつまさきあがり小石はち、老女い足をいたはりて、ヤ ゑ〳〵 お姫様、行先遠き旅の空ほ身の勞も出やせん、マアしばらくと道芝よ立やすらへば、菊の前、ヲ、みづからが氣のせく儘、跡先見ず よ道を急ぎ、年寄たそなたのあんぎ、足がいたみいせぬかやと、互よとふつといれつる、ゑんみなじみの底ふかき、よほの浦なみ、山ゝも ゑげりし峯い、八わうじ、いそべよ見ゆる唐崎の松い扇のかゐめとやあれこそ、ゑがの、山ごへの、よき詠ぞと教ゆれば菊の前打ながめ、ヲ ゑがの山といあれ成か、なつかしや忠度様のほ詠歌を、千載集へ父上が撰入給へ共、勅勘のほ身をはゞかり讀人ゑれずと末の世迄、ほ名

を削しはねなさを、は歎の涙よて、濡し筐の片袖い、忍びあふ夜の添ぶしも君い、左りが寐がつてよ、打きせ給ひし口ずさみ、面影の、かすめる月ぞやどりける、はるや昔の袖の涙よ、袖の涙や有し夜の、ぬしい雲井よ隔りて、昔語りと成給いゞ、此身の果いいかならんと、歎よ草の露ぞうく、おゐし思ひを押かくし、老女い力つく杖よ道を、たすけて行さきをたぐり、寄なん布引山心も、關の別れより、伊勢やおいりの海づらよ立波を見ていとゞしく、過よしかたい遠ざかり、去らぬ山ゝ里ゝよ、日をかさね夜をかさねはつれし、髪よ風いとふ濱松過て、山坂よかゝりまりてやおきつなみ、富士のけふりの立のぼり、行衛も去らぬ旅人の姫ぞせ連と悪口よ、君とそひねよともしびよせて、かゝげて見れば、そふたかく、いとはづかしや、けせばいとしいお顔が見へぬ、是ぞ誠よ戀のやみそふいふたがむりかへ、いとはづかしや、けせばいとしいお顔が見へぬ、是ぞまことよ戀

のやみそふいふたがむりかへ、むりもわやくも、ゑたがいのつまよふたたび大いそと、心計りいそがれて足りもつるゝ藤澤やゑよしの便りはし月夜かまくら、よこそ、着よけれ榮へぬる平家の一門悉、西海の波よ亡び再び榮る源氏のゝ代、猶長久のゝ祈願と鶴が岡の八幡宮、新よ造營有ければ、日ゝよ威を增神詣賑りふ空も長閑なる、向ふの方々のつさ〳〵供人引連醒井兵太、家來共、道ゝもいふ通主君頼朝公、平家の餘類り根を斷て葉を枯せとの仰よよつて、隱れ忍ぶ殘黨を取誡る身が役目、隨分四方よ眼をくばり、うさんな者と見るならば、男女よ限らず搦とれ、手柄りそち達ほうびり某、急度ヤ渡したとはい〳〵も仰山よ社深くぞ入よける、跡よ社參の一むれり徒士の附ゝも、一際目立旅乘物松かげよ舁すへて、是り鶴が岡八幡宮とヤまして源氏のゝ世を守りのゝ神、ゝ拜がてらよ風景もゝ覽なされて然るべう存まするとと、頭をさぐれば乘

物が、武士よりあらぬ風俗り九條の町よ全盛を菅原といふ太夫職是り是り今都でり口利の牽頭樣、喜六樣宗助樣などゝいふて大がいあまい若樣達り、水銀なしよてん〳〵、から〳〵、天上さするからくりの名人樣達、それを供の侍よしてほんよァかりつた趣向でりないかいなァから打揃ふていたらゞ主りきつい機嫌であろ、そしてもふ六彌太樣の屋敷り爰からりつゐ近いげな、三年ぶりで顔見よふかとわえや飛立やうよ思ふてゐるりいなァいか樣是りは尤此喜六宗助り日比旦那のお氣よ入、お供をするもお馴染だけ、是からおまへり大名の奥樣訛りちらす女中の中へ、ヲ、えんきわえやいやいなと今迄のせりふでりァぶたいつきが濟ませぬ、高が旦那り幕の内、は一門のお付合などり路考慶子で雲上よ万事そこらりちよんの間でお付合なされませと、餘所へ通せぬ敎の詞えつた同士こそすゝしけれ、そこらりわしがこんたんえてゐる帶の仕樣

此形も藏屋敷の振舞でよう見て置た屋敷の風俗、遊ばす物ぢやないんいな、おつとよし〳〵、それんそふぢやが久しぶりのお寐間の段、お勞の出ぬ樣ゑ地黃丸でもあがつて、ぢたが必藥酒んに無用と、咄し半へ、家來引連醒井兵太、鎌倉ゑ見馴ぬ女の風俗都者ゑ極つた、平家の餘類も疑んしい連歸つて吟味する、ソレ引立いと立かゝれゞ、傍ゑ二人の牽頭んわなわな、都者とんに啐方、ぢたがお尋なされます平家とやらかつけとやら微塵も覺んでざりませぬ、ヤ偽るまい〳〵、武士ゑ似合ぬがち〳〵と震ふん曲者、ソレくゝれと二人を投付蹴飛せゞ、物ゑ馴たる曾原ん騷ぬ色目ぢとやかゑ、イヤこれ聊爾さんすなお侍、自士岡部ノ六彌太忠澄が女房と、聞よりも醒井兵太、スリヤおまへ樣ゑん六彌太殿のに內證とな、是んく存せぬ事迎慮外千万、拙者義ん則六彌太殿の下目付、イヤモウ何が物でざります、當時はさゝの六彌太殿へかういふ事が聞へてん何さ〳〵、とゑか

く是ゝ家來共が麁相不調法千万と、まじめゝなれゞ二人の牽頭、醜井兵太頭が高い、ハアまちつと高い、ハア〳〵と家來も一度ゝ先倒額を土ゝすり付る、其間ゝ菅原目まぜで去らせ、乘物上させ足早ゝ引添てこそ急行、跡ゝゝ一度ゝ顔を上、是ゝ去たり夢でゝないかや、夢去やゝよつて醒井兵太皆こい〳〵と打連て松かげ、ゝこそ走行、跡へ去と〳〵、二人連花や楓と見し夫の、便を何と菊の前、詞の林打連てあてども波のかげ遠き宮居を、暫し伏おがみ、何と林此樣ゝうか〳〵とさまゝふも、忠度樣のお顔が見たさ須磨の軍の乱れよりどふ成なされた事去やゝら、此中ゝ打つづき夢見の惡さ、わ去やいかふ氣ゝかゝるゝいの、お道理〳〵、そりや此乳母も同し事、以前の夫ゝ平家の侍兄と妹と二人の子の親樣子有て退去去た、かゝいげもない夫さへ思ひ出すが女のならひ娘ゝ都ゝ勤表公、兄太五平も軍ゝ出ると云ましたが、どふ成おつた事去やゝら、おまへも

仏ら思ひ出す事計で、夜がなよつぴて泣くらす長の旅路のほ氣休め、ちと床几へとすゝめられ涙交りの身の上咄し、並木のかげよ誰やらん深編笠の浪人姿後の方よりの醒井兵太様子立聞家來共、ソレ搦よと追取まく林の姫を後よかてひ、ヤア聊爾せまいぞ我〻の八幡様へ參詣の者、何故よ搦よとの、ヤアぬかすまい、聞た所が忠度の妻菊の前、平家の餘類遁れぬ所と林を引退、姫君よ飛かゝるをなふコレ待てとゝむるを蹴倒し、泣さけぶ菊の前をひんだかへ、既よ危き折からよ深編笠の侍が、兵太が利腕ぐつと捻上蹴飛せば、アイタ、ヤア爰なあみ笠め、太切な科人を召捕役目の妨ひろぐ、先僧から詮議有やつ、くゝれよたゝけと立かゝれば、物をもいわず雑兵を宙よ掴で天狗の礫ばらり〳〵と投飛せば、命が大事ぞや家來共、皆こい〳〵と云捨て遁散よてそ逃て行、跡よ二人の胸押なで、是ば〳〵となたかの存ませぬが、危い所へおかげ故、コレおまへもお禮おつ去やれと、

姫君倶〻嬉し泣手を合すれば、これ〳〵お禮よりも及ばぬ嘸には難義、シテ承われば女中よりも忠度殿よ縁の有菊の前とな、いや左樣でもお隱しなされなとつくと樣子承りつた、おいとしや忠度卿よりも早には果なされたりいの、そもやはんかシテ〳〵樣子りには存ならば聞してたべとそゞろ涙のふるひ聲、ツレ悔りりお道理〳〵、さいつ比すまの浦の合戰よ、岡部の六彌太忠澄よ渡り合、右の腕を打落され、つゐよあとなくはさいごと憐よ世間の取沙汰、拙者京都の者なれば兼〻和歌の名人と聞及んだ忠度卿、お咄を申すも他生の縁と、聞内よりも姫君りに、こりの何とせんおいとしや、跡よ殘りて自りの何樂しみよながらへん、なむあみだ佛と懷劍よて自害と見ゆるをなふコレ待てと、林がなだめとゞめてもイヤ〳〵はなして殺して情を、やとといむる、かいも泣さけぶ、ツレこれ女中、死る命を忠度卿の爲よ捨ふと思ふ心りないか、ハ、何といり を、やんす、過行給ふ忠度樣の爲

よ此命を捨いとい、どふゑたら又お爲よ成ませうおと、いふよ浪人傍をながめ小聲よ成、さすがい俊成卿のに息女、雲の上人程有て敵を討ふといふお心が付ぬかと、云れて姫君涙をはらひ、ほんよそふゑや悲しいと計よ心が付て、夫の修羅の妄執をはらす敵といふは岡部、六彌太、林お爲やお姫樣ござりませと逸散よかけ行をゝ、これ〳〵待た〳〵、其樣よゑどけなうていゝ、敵討心元ない、岡部、六彌太忠澄といふていゝ武藏一國の大名なれ共、おのれ討で置ふかと女心の一念力とくとかたまりましたかなと、心さゞれゞ二人共、ほんよそふゑやと懷劍よて互よ自身の髻を切んとすれゞ押とゞめ、いかよもに心底見へました、未來の夫へ命を捨又の夫は重ぬといふ切髮俱よ付添尼法師とさゝをかへても主人の敵討そふといふ老女の誠、適見事〳〵、緣いおけれど見捨ぬい武士の情と、矢立取出し鼻紙よ、さら〳〵さつと、書認め、此通、敵の方への入込や

ぢ、は縁あらば重て逢ふと立歸れば、ハアはつと押いたゞき、イヤこれゆお前のお名ゝとゝふ隙も、松吹風よ隔られ、主從二人默き合立別れてゞ急行、

四ツト作藏彌嘉内上方からけふ奥樣がゞざるといふが、旦那六彌太樣の奥樣か、但ゝ隱居樂人齋樣の奥樣かいなァこなやつゑらないゝ〳〵、けふゞざる奥樣といふゝゝ旦那樣が上方でこつてりと談ゑやつたゝ色だゝやい、何ゝ色とゝ紅の事でゝない、かいイヤこいつけふがる兵でゝ有る、色といふゝな都九條で菅原といふゝ傾城の事だゝやい、スリヤあの十文字とやらふんであるく、國太夫節の親方殿か、チイやい、旦那六彌太樣の奥樣よ成よ、けふ此内へぬめり込のさ、なんとうまい事でゝないか、イヤサ夫ゝそふと、合點のいかないゝ是の隱居樣、は子息の六彌太樣とは、同年くらゐの親子の中ゝは新參者で樣子はゑらゝいが、ありやァ何たる事だいなァゝらもすつきり合點がいかない、親は樣ゑやといふてゝあの樣よ大事よ

さつきやるゝ、若ゝ旦那の念者でゝ有まいか、きたが念者を兄分といふゝ聞たが親分とゝあたらしいと、仇口〻の折からは門前賑ゝふ遠見のきらせ、上方の奥様只今是へは入と、いふもとつかゝ奥ゐる待設の女中万着連打連出迎へゞ早舁入る乗物は牽頭末社を供廻り、思ひ付なる出立ゝ、きろとめかざる風情なり中はも小槇ゝ局役、きとやかは手をつかへ、是ゝ〳〵長のは道中は機嫌宜しうおめでたいお國入いざゞお入と乗物の戸を明お手を取〻は、かしづかれつ〻立出る姿ゝ武家をやつせ共、昔を殘す詞くせ、是ゝ〳〵皆様いかゐお取持どれがどれやらうゐうゐきい、万事ゝ皆を頼ぞへ、なんと喜六主宗助主と、いゝれてシッシはてこれゞ、いひゐいなァわきや聞へぬゝむつ様、久しぶりの女房の顔、ヤレ菅原か久しや〳〵と出さんしそふな所を、昔はかゝらぬおもゝせぶりか、わきや逢たら一通きつと一番云ねゞならぬと、長ふすゝるも日比のならゝせ、

傍よりの手よ汗よ、ちやつと居直りほんよわしと云た事が始ての付合よなめたらしいぞ、笑止と袖覆ふさへ里めかし、何と皆見やつたか、都女中のわさ〳〵とかぶき芝居を見る様な風俗、ほんよそれ〳〵、いやナ奥様、殿様の今日叶のぬに用で外へに出お歸りも追付まあ夫迄のお勞休めお湯でもめして緩まつと、に祝言のに用意遊ばせ、皆のお衆の勝手で休息いざ〳〵せ給へと皆〳〵の奥と口とに立別れ、打連てこそ入よけれ、程なく又もえらせの侍奥方様都方只今お入と、詞の下より姚局て是やまあどふ云や、どちらぞが狐でのない、か是非一人の紛れ者よ極つた、どふやら奥よござるのが、ぞ、笑止の詞付尻聲がなかつた、化されまいぞ合點かと、睫をぬらす其隙よ、日がさよつる〳〵八もんじ、梅や、櫻と見ゆれ共、散てかひなき袖の露やつせゞやつす菊の前、昔の雲井の月よめでけふの浮身を川竹の流れよ染るはで衣裝林の花車よ身をかへて赤前垂

の紅も顔の紅葉と照添て餘所目を包む里詞、コレヤ太夫さん、爰が日比逢たがらんしたむつ樣のおやしき、けふといふけふ天下晴ての奥樣遠慮ないい、必氣をきつかりと持きやんせ、と、いへどきほれし菊の前我のみ世をぱかとち顔、別れよし、其日計い廻りきて、又も返らぬ人ぞ戀しきと、上東門院の女房伊勢太輔の歌の心、夕の雲朝の雨と誓ひしことも楚王の夢、はかないい浮世あじきなの、此身の上と計よて思いず、結ぶ露時雨、ア、これ〳〵夫いまあ何いい きやんす、あられもない事ばつかり、エ、聞へた、昔の勤を隱そふと、堂上めかして、虚言、都九條のお領城菅原といふ事い、何ぼ隱しても知て有、皆の女中い都勝り睟のういもりナア皆樣、宜しう萬事お指圖と、いふ間あらせず先走り、旦那お歸り〳〵と、きらせよ、姚口を揃へ、サアもふ樂ぎや、一時よ二人來た嫁ぼの正躰、本阿彌樣よかけたらばつぬくら紛れよさぐつても、はいり付けた門口い心覺へが有そな

物と、云捨奥へ入跡へ、岡部、六彌太忠澄ゝ威勢も高き廣書院、ゑづ〳〵歸る廊下口、二人ゝ見るよりあのこなたゝ、きのふ逢た深編笠の侍、いか樣日外見ゑり有六彌太殿ゑ似た顔と、思へどかゝりし、形恰好、ふしぎゑ有たが其こなたが、いかゑも横目の忍び姿、岡部、六彌太忠澄さ、スリヤ願ふ所の夫の敵と、手早く懐劍突かくる、二人の利腕ゑつかとおさへ、コリヤ〳〵まだ祝言もせぬ中から、悋氣いさかひ早い〳〵ナ合點か、此六彌太を付ねらふ付つ廻しつ戀慕ふ、其女房を合點で呼迎へたゝ互の心底、年月疎縁ゑ打過た、恨もあらふ憎かろふ道理ゑや、ハテサ憎い〳〵ゝ可愛の裏よ、ふ、ゝ、嬉しい〳〵、ゑたが走を妾と云聘を妻といふ、婚儀ゝ人の大禮なれゞ、表立て祝言を取結ぶゝ暮、六つ、寢物語ゝ浮世の夢老女、一間ゑ伴ひ用意をゑめされ、身ゝ太切ゑ親人へ今日のゆ機嫌窺ひ、マア夫迄ゝおいきやれさ、スリヤ暮六つ限りゑ婚禮の用意、忠澄殿、忠澄樣、待ておりますぞへ、ハテ扨せく事ゝな

いおいきやれと、詞の目釘打ちめし、心隔の襖と襖引別れてゞ「入まける、
まほ鹿の妻待兼て菅原ゝ、そろ〳〵出る奥の間ゝ音も耳なれし里の歌、
誠なれ共、あゝねばうそよ、ちんき心のやるせおや、ア胡弓三絃ゝは隠居
様をいさめのは酒宴、ほんよ歌のふしでゝある、何ぼ六彌太様の心いか
ゝるまいと思ふて居れど、三とせ隔て逢迄ゝわちやどふも心が濟ぬ、逢
たらどふしてこふしてと案じも同じ菊の前、暮六つ迄もとけしなく、だ
まして討ん下心、忍び出たる背と背、べつたり行合ア、こゝと、飛のく二人
が顔ぢろ〳〵、ヘ、おまへゝどなたぢやへ、ハイわしゝ私ぢやが、マアそふかつ
ぢやるおまへゝどなたぢやへと、問かけられて菊の前、わしゝ、ア慮外な
がら、岡部六彌太が奥様、都九條の菅原といふちやの果でござんすと、聞
て菅原ホ、こりやおかしい、其菅原といふ傾城のは本家様をとらまへ
て、菅原といふちやの果ぢやとゝ、きつゝ間違ひやう、ム、妙衆か但又家

中衆のお内儀様か近付よ成さ玄よと、上から出れば菊の前、イヤ〳〵和歌三神を證據其菅原へわしゑやへいあ、イヤおれが事ゑや、イヤ〳〵わしゑやわしゑやと聞て菅原あきれ果、コリヤまあ何のこつちや、ム、聞へた扨へ大事の兵を吸取ふとする、鯔の様な女ゑやなそして女ああた憎てらしいあの美くしい器量へいの、サア〳〵こゑやもふ氣疎いかんゑやくが發つてきたへいあ、ム、よい〳〵、互まいふてへ水かけ論、深い淺いへ夫が證據たとへ年號へ變る共いかあ〳〵かへらぬ中直ま逢て吟味する、サ、おゑやいこゑと立上れば、ヤア〳〵兩人待ま と聲かけて、ゆるぎ出たる此家の隱居名も身の上も樂人齋、はうろく頭巾大袍左右ま胡弓と三絃を提二人を尻目まかけ、ア、紛へしき二人の菅原詮議の道具へ此胡弓と三絃、誠や傾城白拍子は、酒色ま流れて淫聲を顯へす、二人の内どちらでも、誠傾城菅原ま極まれば、祝言さするへ此親のこふけ、彈聞ふと褥の上、脇息取て打もた

れ、兩人ハヲ之ぶとい、何隙どると手詰の場所、ヤア〳〵親人、音曲ふ閑なさるるよ及べず、其一人の紛者引出してお目よかけんと、立出る六彌太を取て引よせ、ヤア小ざかしい親をもどく不孝者見るも中〳〵いま〳〵しいと、脇息取てつゞけ打、なふコレ待てと菅原と倶よ驚く菊の前、わなゝきふるへぺ六彌太が、衿がみ取て引よする。ともよ若木の親子の中様子有げよ見へよける、ヤア彈女ヤアきよろ〳〵と何うぢつくとせんかたも、涙かた手よ連彈の、心ゝやかわるらん、身をすつる、里あれぺてそ浮瀬の、あるを頼よ、うき勤、ヤアもふよいひくな、詮議ハ濟だ、九條の町の傾城菅原といふハ、此女よ極つたと思ひがけなき菊の前、ヤイ〳〵おまへハきつい調子聞とてもの事よ祝言をと、いそ〳〵すれぺ氣づかひすな、モウ暮六つよ程も有まい、勝手へ入て用意〳〵、ヤ、添いコレこちの人必詞違へまいと、敵討ふの氣ハはり弓ヤ、これ〳〵と菅原が、どむるもよそよ走入、やらじとかけ入

菅原を引とゞめて樂人齋、我上方よ有し時見ぬ戀風よあてがれし、九條の里の傾城菅原、けふといふけふめやり逢も不思議の因縁世悴六彌太、此女よ暇をやれ、エ、それゝ、夫ゝとゝ得心せぬな、サア〳〵どふ玄やとせり詰られて返答も軻果てゞ見へよける、イヤこれそこな若い親仁様、こなさんゝ〳〵〳〵あちらをほんの菅原玄やといふて、今又私を菅原玄やの、イヤ見ぬ戀よ風ひいたのと、がつくりそつくりな物の云やう、若又六彌太様がさらんしたらどうせうと思はんす、ヨ、女房よして抱てねる、エ、ムヽヽ今奥へやつたゝな、ゝりや薩摩守忠度が云かゝした菊の前さ、悴六彌太ゝ夫の敵祝言といふゝ僞り、女よ涙もろい悴のうんつく、敵を討れるアリヤ約束玄やゝやいと、聞より菅原狂氣のごとく、そんなら、あの今の女中様よ、命をやつて、此わしとゝどの命で添玄やんす、海山こへてはる〳〵と、添よさた女房の身よも成て見たがよい、餘りの事よ涙さへ胸よ冰て出ぬ

いひなとたしゝ疊のいひがいなき、とても命のねぐさうだ六彌太運
深てもいんまよ若後家嫁よ歎をかけるも不便子より達者な此親仁
思ひてんだる戀の意路、ふうといひふがひふまひがけふの今から身が
女房ふうといへやい〳〵親孝行者やギヤ悴きり〳〵暇の狀をかけ、子い
三界の首かせとい、今身の上よ去られたと傍若無人の横車持餘してぞ
見へよける菅原涙打はらひほんよそふ去や、よその女よ見かへる夫心
中立るい夫きな愚痴そんならおれよ隨ふが、そく隨ふ段が帶といせねて
花やろと立寄ふり、そゞなる刀拔打よ切てかゝるをかいくゞり、ゞてり
やちよきぎいなほで轉業とはね飛せゞ、透間なく丈切かくるを眞のあ
てうんを計よ倒れば、六彌太透さず取て投注連を餝し箱よりも陣笠鎧
引出せゞ、見るゑ樂人齋ひるむ所をはつたとねめ付陣笠鎧兩手よさ
さげ、なんと親人、此二色の笠鎧覺が有ふ見去りつらん、誠や故人の詞よ

も用ひられる時い鼠も虎となるといふい、まだも能ある人の身の上、な天命ゑらずの匹夫め、今改めていふまいあらねど、女房菅原が六彌太をふがひなしと思はん面ばれ、もとこなやつは六彌太が猿持の雜兵所存有て此ごとく親と敬ひ尊敬すれば方量もなき兼ての我儘あまつさへ我女房よ無躰の戀慕、無法非道の人畜め、わるく動かば五體を八つ裂ひらとでも動いて見よと鎧をもうてさん〳〵よ折れよ碎と打なや。せば頭巾いぬげて撥鬢奴輿の覺たる風情なり、恥を恥共思はぬ強惡とあ六彌太の恩ゑらずめ、今鎌倉で岡部の六彌太といいれて、榮花よ暮すい誰樣が影ゑやぞやい、わとやおめ〳〵と忠度よ組ゑかれたを忘れたな、其時よ此郎等右の腕を切落さずば此首は有まじがないいど手柄は此奴よいは是からばれ次手、鎌倉殿のに所へいて、六彌太が高名が、此鼻がさしましたと注進の上武藏一國我手よ入るが意趣ばらし、待て

おれべら坊めと、かけ行所を菅原がそふは、させぬと切付る、六彌太ハ只、たゞこの畑さはがぬ太五平菅原を膝の下よゑつかとねぢ付、コリヤまつ此如く薩摩守忠度があの六彌太を下よ組敷首をかゝんとせし所、一間をかけ出菊の前かう切たかと太五平が右の腕を打落し、敵といふハ六彌太殿と思ひの外、誠の敵は此太五平夫の恨をとゞめの刀、おもひゑれと立寄給へゞ、ヤアこれ今暫く待てたべと、起上る太五平ハ、手負よ屈せぬ強氣の面色、アヽ忝い〳〵姫君、此奴が念がとゞいて、よう切て下さりましたの、コリヤ妹と初霜と、聞て悔り菅原は、ムウ初霜といふは私が稚名夫を知たこな樣ハと、問れて太五平涙をうかめ、ヲヽかう計いふては合點の行ぬは尤おりや稚い時よ別れた、わが兄の兵之助ゑやハやいと、聞よいよ〳〵ふしぎはれず、ムヽ其又現在兄樣が此妹よ惚たといひ、そして何ゑや姫君樣、よう切て下さつたと、覺悟の樣子は合點がいかぬ、ヲヽ疑はしいは尤、今さ

ら語るも涙の種、姫君樣も聞てたべ、元我親は、其譯は此六彌太が推量
よ違はず、汝が親は平家の大將、三位中將重衡の家臣、臆病者の名を取し、
後藤兵衞守長で有ふがなと、聞て太五平、はつと仰天、扨〻驚入たる
忠澄殿の明察、草よも心置露の、やどり定めぬ、我生立に存ぜられし樣子
いいかよ、それ誰か有、繩付ひけと詞の下、思ひがけなき乳母の林、見る
めいぶせき繩目の恥妹は見るも母樣かおなつかしやと走寄此ア繩
目は何故と姫も手負も驚けば、始終の樣子一通六彌太が云聞さん菊
の前もお聞有、さいつ比都出陣の折から、に身の父上俊成卿も密の內意、
和歌の弟子たる忠度は、一方ならぬ緣もあれば、くれ〳〵頼と餘義なき
仰所よ源平生田の合戰、向ふ敵と渡り合互よ、馬を乘はおし念なう下よ
組敷しが、面ざし見れば見知有忠度卿、扨こそ俊成卿のに賴は爰ぞと心
得、助んと思ひながらも名有敵いかゞはせんとためろふ中、力勝りの忠

度卿よ、ばね返されて此六彌太、組ゑかれしを下郎の汝、思ひがけなく後ろ、右の腕を切し故、いたれるかいも涙ながら、に首討ておとがましう、戎門の數よ列る中、合點のいかぬい汝が胸中、忠度卿よ打かけしは、紛ひもなき源氏方夫よは違ひ詞のはしゝ、源氏をさみする面魂、心得ずと思ふより、兼て見置し此頭巾、裏よ正しく書付しは、三位中將重衡の戒名、朝夕いたゞく心の底掇こそゑれ者手ばなされずと、思ひ付たる恩ゑかし親と敬ひ是迄よ心を付しは其方が、謀叛を押ゆる情の獄屋、今日是へ両人をそびき入しは、汝が素情責さいなんで尋んため、所よ思いず其方が情と名のるいこゝや下郎の猿智惠あんと思ひゑつたかと、始終を聞て太五平い肌骨を、貫く吐息の炎、母い涙の顏を上、後藤兵衛守長殿よ連添有しい廿年以前、七つと三つのあの子供を、付て離別の憂難義妹が乳よて漸と俊成卿へ乳母奉公、妹い傾城あの兒い、有よあられぬわんぱく

本郎、侍の子といふたらば猶我儘が募らふかと、勘當をして置其中に、いつぞや太五平我内へ刀を盗まはいつたを、見付て聞べ軍に出るとゝいふて幸高名して、侍の名を顯はせよと、家の系圖を折紙と、刀に添てやつたるが、返つて害にあつたよな。いかにも貴ひし其系圖開いて見れば我親は、後藤兵衛守長ア、恥しからぬ平家の侍おのれ何でも源氏に紛れ込、雜兵と成裏切し、親守長に對面せんと、いさみに勇む一の谷、後藤兵衛守長は、主君中將重衡をふり捨て逃たりし、臆病者畜生武士と軍中の取ざた、なむ三寶我親は、不覺の惡名取しかと、胸に磐石、五臟に石火矢、なんぼう無念に有けるが、よし〳〵源氏の侍の首取て高名し親子の耻を雪がんと、心を碎く生田の戰場夕暮空の、ほのぐらく涙打際にひつ組で、上に成たれ、慥に貴殿、シヤ六彌太殿と思ふより、右の腕を只一討、よく〳〵見れば、でもいかに、薩摩守忠度卿。ヒ、ヱなしたりなよし其場にて腹切んとは

思ひしかど、イヤ〳〵忠義を顯わす時節もと、味方顔よてゐ首を、やみ〳〵こなたよ討したる、無念といふも我誤り、かくけどられし上からわ、我一分の我を立ても、迎る詮なき平家のゐ運せめていらざる此命姫君よ討れんと、殺されよ出た手柄咄し、ヱ、おでかしなされた姫君様、忠度卿の右の腕、切た刀で切るゝも、此世の因果をはたす道理、思へば〳〵不運なる我身の上と悔泣、扨わと驚人ゝの中よ妹わ傍よ有、刀取上涙ながら、顔見ぬ父の筐かと、思へばいとゞ胸せまりくどき、歎ば太五平わ、妹が持たる抜刀、手を持ち添てめての脇腹ぐつとつゝこむ覺悟の最期、こわ〳〵いかよ何故と親子わ心取乱せば、ア、さわぐまい〳〵と押えづめ、平家方の此兄を、切たわ妹が源氏へ忠義、此一刀の手柄よめんじ、ヤえ六彌太殿、必見捨てやつて下さりますな、たりたふたりのはし折かゞみ、わたえやあいつがふびんよでざる、成人えて名わ菅原と聞たを便り、上方へ登つた

次手よ九條の町。なつかしさよ逢ふと思へど身ゝかくすげのさびた形全盛かざる妹が耻と、三筋の町の格子の先。よいよ鹿子樣、ヨウつりひ樣と、ぞめきよ紛れて名をとへゞ、客よ揚られ柏やの二階の障子よ影法師、三絃取てなげぶしの、聲を聞たがコリヤ兄弟の名乘其時の音色も聲も有〳〵と、おりや耳の底よ去み付て、今よ忘れぬ兄弟のよしみ、それ故最前三絃で慥よ妹と見極めても、平家よ緣有そちなれゞ、よもや添てゝ下さるまじと、現在妹よ、女房よなれの惚たのと、心よ思ゝぬ悪黨も、かくはからゝん心の内、推量ーてたべ母者人、ェ、つゐよ一日孝行せず、先だつ不孝赦して下され、せめて未來ゝ、勤當〳〵をと跡いひ兼る、いぢらしさ母ゝ取分妹も正體涙よ菊の前、我とても恩と情よからまされ敵さへなき身の上ゝ、兎よりかくよも我つまの、甲斐なきに運と計よて見合す四人がとも涙前後、ふかくよ見へけるが、何思ひけん六彌太ゝ林がなゝめ引ぼどき、

太五平が白狀よて家名知れぺ詮議よ及ばず、女ながらも敵の餘類、ヤア〳〵後藤兵衛が妻娘此家よ叶ハぬ早出て行と、聞て菅原今更よそりや餘りゑやどうよく云やと、いふをも聞ず姫と林を引立、庭へ突出し、女房去た、ハテこりややり手の付た傾城菅原、敵の娘と聞てハ添れぬ、もとの廓へ流し者付添あるくハ、やり手の役目、スリヤ此わしハ、チ、サ兄弟の縁が切れぺコリヤ女房、一世の別れの名殘を惜めと情の詞、ハア盡せぬ恩と伏おがむ、折から軍子木家中の夜廻り、六彌太邊よ心付、コリヤくそこな傾城やり手、古郷へ歸る錦の袋、ソレ持て行と投出す、二人ハ立寄取上見れぺ、行暮て木の下影を宿とせぺ、ヲ、其下の句ハ、花や今宵のあるじならまし、忠度卿のざいごの一首、ヤア扨ハ筐かハアはつと歎給へぺ林も俱よ、ありし昔を悔泣、ハテ扨これ此六彌太が志寸の情源氏ハ今を盛の日の出、平家ハ暮行、アレ約束の暮六ツ、夜よ入ぺ敵味方のあいろが見へぬ、ソレ早ふ〳〵、ハアお志忘れハせし、も

おさらばと立上れば、手負ひ今ぞ此世の名殘、花や今宵のちり櫻妹ひ一人親兄の別れを胸よ八重櫻、姫ひ筐の言の葉よむすぶ心のいと櫻、あとよ老木のうばざくら涙の雨や、小夜あらし、えやうじふぢやうひ世の中のふだん櫻といさめてもつきぬなごりの、山ざくらちり〳〵よ、こそわかれゆく

○第五

魏王ひ鄭哀が讒よよつて美人の鼻を剝えむるとかや、征夷將軍頼朝公相從ふ大小名、岡部、六彌太忠澄を初威義を、正して相詰る頼朝ば簾よ向いせ給ひ、此度の戰ひよ平家の一門西海の浪の泡と消失し事、全く頼朝が武略よあらず、是皆神明佛陀のば加護と存奉ると臣下の詞も奥床し、平の時忠笏取直し、西國よて源九郎義經平家を悉討亡し、其虚よ乘て兄頼朝も討取一天下を併呑せんと某をたばかり卿の君を娶神璽内侍所

奪ひ、直ゝ鎌倉へ責入ん由急告知せん爲來つたり、急度征伐然るべしと賢人顔の佞人ゝいねど夫と知れける、六彌太聞兼つゝと出、何と云るゝ時忠卿義經公ゝ限り左樣なゝ所存少もなく、腰越迄ゝ出有しと平山が讒言故鎌倉へもゝ入なく、直ゝゝ切腹召るべきを舊臣の輩押とゝめ、我君への取なしゝ六彌太が披露承ゝる、夫ゝゝ邊が何ゝつて扣へ召れとき付れば、時忠も反打かけ互ゝ色立見へければ、頼朝ゝばしとせいし給ひ、やをれ六彌太佞人原が讒言を用ゆべき我ならず、義經腰越ゝ屯するゝ鎌倉をくつがへさんとの手配ならん、さすれば弟迎容赦ゝならず討取て我存念を晴すべしと氣色かゝつて宣へば、時忠ゝ思ふつぼ心の内ゝ含笑、六彌太猶もすゝみ寄、然らば義經公誠の謀叛ゝもなされゝ、三種の神器の内神璽内侍所此二品ゝ先達て義經公のゝ手ゝ有、帝都ゝ守護ゝ奪ゝ取ゝ給ゝ則官軍、そゝゝ敵對弓引給ふゝ朝敵も祠前武備盛

ある時に返つて其身を害すとや、此義いかゞと言上すれば、頼朝騒ぎ、其義に某工夫をこらし置たる事あんなれ其子細に、安徳天皇十握の剣を携入水有しと聞より早、都八條大納言兼房卿とや合せ、老松若松といふ海士子供を浪間より入て海底を捜させけるよ、龍宮城へ奪ひたる十握の剣を取返し、兼房卿は指上しをば所持有てば下向、頼朝拝諾仕り、此桐が谷へ新に殿をこつらひ将軍の宮と博き、則此宮方綸旨を乞受、義経との戰に官軍と官軍のはれ勝負、幸の諸大名一同の出仕、それ〳〵との詞の中、はつと領掌謹でば剣の筥を携て、ば簾間近く持出る、頼朝公恭や敷寶剣を取かざり、天顔の恐れ有と玉座のば簾半比迄卷上れば各一度よ尊敬する、時忠大口明てから〳〵と笑ひ頼朝に智仁兼備の大将と聞しよ違ひし黒將よな、誰よよらず寶剣を所持こたる者あらば將軍の宮と敬ふかと、つゝと立寄寶剣取て打折〳〵白洲へかつぱと投付れ

ゞ、是れと皆〻仰天廢忘、時忠れ緩〻と座よ直り、騒れそ頼朝、あの寶劍れ紛れもなき眞赤な贋物、シテ〳〵其贋物といふ慥な證據が、ヲ、證據なくて折べきや、寶劍を所持えたる者當宮よ立ると有る故、云聞するよつく聞け、都よて義經某を招き、何とぞ三種の神寶奪ひ取てくれよと有、密の頼、のつひきならず智略を以て奪取しかど、呑込ぬ義經が心服故先二色れ渡したれ共、ほ寶隨一の寶劍れ某が肌身も離さず急度所持せり、疑れしくゞ是見よと懐中が取出せゞ邊もかゞやく十握のほ劍、頼朝公を初として列座の人〻一時よ、あつと恐れをなしよけり、頼朝重て宣ふは、今がは時忠卿を將軍の宮と仰奉らん、ヤア〳〵諸大名万歳を唱られよと、棟梁の臣の一言よもつてうしられ、勝よ乘、此上れ贋宮を引出し面縛させんと、ずつと立寄ほ簾引ちぎれゞコレいかよ、思ひがけなき判官義經寶劍奪取もんどり打せ足下よぐつと踏付給ひ、ヤア天命えらずの大納言安德天皇

寶劔をいだき入水有しと僞りしを、合點行ずと察るゝに邊が奪ひ所持する由、兄頼朝と云合せ樣〻心を盡したゝ、此寶劔を奪返さん謀、尋常ゝ繩かゝられよと仁心深き義經の、詞ゝひるまぬ横紙破り無念の顔色はがみをなし、たばかられし奇怪千万、平山と心を合せ儕等兄弟同士打させ、一天下を一呑と巧し事も水の泡、よし〳〵此上ゝ絶體絶命命限りゝ切拔んと太刀ひん拔て切付る、引ばづして勾欄ゟ白洲へどうと蹴落し給へゞ、六彌太すかさず飛かゝり高手小手ゝいましむる、頼朝心地よげゝ打守らせ給ひ、國家をさゝがす大罪人刑罰急度糺すべし、それはからへと宣ふ所へ士砂踏ちらしあゝたゞ敷ゑらせの早打かけ來り、扨も平山の武者所謀叛の工顯ゝれし故、扇が谷ゝ野陣を搆へ此ゝ殿を退取卷責入んとの催故、早速ゝ注進仕ると大息ついて訴ふれゞ、義經ゝつと打笑給ひ、〳〵六彌太、扇が谷平山が陣所ゝ馳向ひ、有無をゝいさず討

取るべし、仰い重き兩將の、詞よつるゝ岡部の六彌太いざ打立や尤と、ほ前よ並居る隨兵共、我先がけん〳〵と勝色見せたるやゑ梅の、花芳しき弓取の、聲もすゞしき軍立ち扇が谷へと、急けり、平山の武者所頼朝兄弟誅罰せんと、扇が谷よ陣屋をゑつらひ士卒を隨へ扣へゐる、かゝる所へ岡部ノ六彌太軍兵引具し眞先よ大音上、平山の武者所、汝が惡事顯れし故、此所よ陣所を搆へば兄弟へ、敵せんよし頼朝の仰を蒙り岡部ノ六彌太向ふたり、手よ立武士いおりあへと高らかよ呼いつたり、かくと聞より平山末重陣屋ゑ踊出、〳〵岡部ノ六彌太、此方ゑ馳向ひ討取んと思ひしよ遙〳〵とよろうせた、某が手をおろすよ及ず、ソレ兩人、物ないいせず討取と、下知しながらよ引かへす、畏つたと醒井番塲無二無三よ討てかゝる、さゑつたりと渡り合持て開いて眞向かざし、尖き刃の雷光石火獅子忿迅虎乱入馬手い竪割弓手い胴切二人が命い草葉の露、ソレ遁すなと軍兵、

共おめいてかゝるをと共せず、向ふやつばら嫌ひなく、大げさ小げさ車切片端切立まくり立、追立〳〵めつた切り、こゝやたまらぬとばら〳〵ばら、跡をえたふて忠澄が遁さじやらじと追て行、さしもの平山途を失ひ馬のはなを立かへて、落行んとせし所へ、岡部六彌太取てかへし、やらじと尾筒をえつかと取、岡〳〵と引戻す、邪魔ひろゞな毛二才め、そこ立さらずゞ蹄よかけ胴腹よ風問を明ん、矢を放せと鎧の鳩胸あをり打立鞭打くれ、乘出せゞ、ハイ〳〵どつていどこへと引留る、追立引留はみ轡、音いちゞゝんからころり駒の嘶土煙、六彌太いらつて突放せゞ馬い前立頭轉倒、ころりと落る平山を起しも立ず取て引ふせ、首引拔んとせし所へ、源義經公平大納言を引立させえず〳〵と立出給ひ、岡手柄〳〵我ゝ兄弟へ敵せんと工む平山縛首討刑罰紀せよと、仰よはつと六彌太忠澄手早よ取ないえつかとかけ、水もたまらず首打落す、かゝる所へ熊谷入道

飛鳥のごとくかけ來り、義經公よ打向ひ、東へ下る道すがら始終の樣子承れる、時忠卿い大納言の位有れば私よい成難し、蓮生法師が出家の役都へ連行禁庭のは差圖を蒙らん何と、ぞ愚僧よは預下されかしと願へば義經打うなづかせ給ひ、神妙〳〵、高位の身あれば、うかつよい殺されず、いかよも和僧が願ひよ任せ時忠を預くべし、直よ都へ連登院の廳のは沙汰よかけ兎もかくも計らふべしと仰よはつと蓮生法師時忠を預り申、莞爾と笑ひてすさみたる一首の歌、極樂よも功の者とや思ふらん、西よ向ひて後見せねばと詠歌を殘し暇乞ゑて歸りける、實末の代よいたりても敵よ後を見せぬとい此斷と云られたり、義經は喜悅限りなく、祿を貪る俟人原を亡せし此上い、三種の神器を守奉り兄弟打連都へ登、此趣を奏問せんいさめや旁打立と、は諚よ任する岡部、六彌太は立ぞと呼いれば、は供奉の大小名綺羅を飾て歸洛有、朝敵亡びの凱歌の聲、

太刀ハ鞘弓ハ袋ト納りて千代榮へぬる源氏、四海太平豐なる國ぞ、久しかりけらし

寶暦元辛未天臘月十一日

明和四年秋再板改正

一の谷嫩軍記終

明治二十四年六月廿四日印刷
明治二十四年六月　日出版

編輯兼發行者　日本橋區通四丁目四番地　內藤加我

印刷者　日本橋區新和泉町壹番地　瀧川三代太郎

發兌　日本橋區通四丁目四番地　金櫻堂